

# 平成19～22年度 大淀町文化財調査報告

現光寺縁起絵巻・佐名伝遺跡・槇ヶ峯古墳の調査

2011.3

奈良県大淀町教育委員会 編



# 序

奈良県内でも有数の大河である吉野川に生まれ、豊かな文化を営んできた我が町は、縄文時代以来、人々の行き交う吉野文化の門戸として栄えてきました。

これらの歴史文化遺産を継承し、調査・研究とその保護・活用を推進するために、大淀町教育委員会では平成20年度より文化財専門職を配置し、よりいっそう充実した内容の各種文化財事業を推し進めてまいりました。このたび刊行の運びとなりました本書も、その成果の一つであります。

本書には、大淀町を代表する古刹・比叢寺(比蘇寺・現光寺)の由来を説く現光寺縁起絵巻、水銀朱の付着する縄文土器が見つかった佐名伝遺跡、県内有数の岩橋型石室をもつ槇ヶ峯古墳についての調査成果を掲載いたしました。これらは、本町を含む吉野地域を形作ってきた悠久の歴史を物語るうえで、いずれも欠かせない重要な成果といつてよいものです。その調査成果を本書にて公刊できることは、本町にとってもひとしおの慶びであります。教育現場や研究機関をはじめとする多くの方々に、本書をご活用いただければ幸甚に思います。

最後になりましたが、調査にあたり様々なご配慮を賜りました地元の皆様と、ご指導を賜りました奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所ならびに多くの先生方に心よりお礼申し上げます。

平成23年3月

大淀町教育委員会 教育長 水掬 義朗

# 例 言

- 1 この本は、次の調査の報告書です。
  - 1 世尊寺所蔵 大淀町指定文化財・現光寺縁起絵巻の調査(および版木の調査)
  - 2 農業用倉庫(兼農園直売所)移転予定地の造成工事に伴う佐名伝遺跡隣接地の工事立会調査
  - 3 大淀町指定史跡・槇ヶ峯古墳の墳丘測量調査
  
- 2 調査対象の所蔵地及び調査地は、奈良県吉野郡大淀町比曾762(世尊寺)、同郡大淀町佐名伝789-1(佐名伝遺跡隣接地)、同郡大淀町新野528(槇ヶ峯古墳)です。
  
- 3 この本で報告する調査は、大淀町教育委員会が以下のとおり実施したものです。
  - 1 現光寺縁起絵巻 平成19(2007)年9月～20年2月、世尊寺の版木 平成22(2010)年7～11月
  - 2 佐名伝遺跡隣接地 平成21(2009)年5～12月
  - 3 槇ヶ峯古墳 平成22(2010)年1月調査体制は以下のとおりです。

調査主体 奈良県大淀町教育委員会  
調査担当 奈良県大淀町教育委員会事務局生涯学習課 松田 度  
(経歴) 平成 17(2005)年 8 月 22 日より同課嘱託職員(学芸員)  
平成 20(2008)年 4 月 1 日より同課・文化財技師  
平成 22(2010)年 4 月 1 日より同課・主任技師  
調査指導 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
  
- 4 この本で用いた高度は絶対標高(T.P.)を示し、方位は磁北を示します。
  
- 5 調査にかかわる整理作業は、奈良県教育委員会ならびに奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、大淀町教育委員会事務局生涯学習課が行いました。
  
- 6 この本の編集は、奈良県教育委員会ならびに奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、大淀町教育委員会事務局生涯学習課が行いました。執筆分担は目次に示したとおりですが、とくに記載のない場合は松田が執筆しています。
  
- 7 この本で報告した現光寺縁起絵巻は世尊寺が、佐名伝遺跡隣接地の出土遺物は奈良県教育委員会との協議のもと大淀町教育委員会が保管しています。多くの方々の閲覧と活用を願っています。なお、現光寺縁起絵巻の写真(図版目次 )については、奈良県教育委員会より提供を受けました。
  
- 8 調査および整理作業、本書の作成に際し、多くの方々よりご指導・ご協力をえました。各報告の末尾にてお礼の言葉を記します。

# 目次

## 調査報告

- 1 現光寺縁起絵巻（平成19年度の調査）…………… 1
  - 調査にいたる経緯
  - 調査の成果
  - ア 調査の方法
  - イ 調査の概要(財団法人元興寺文化財研究所 高橋平明)
  - まとめ

付 世尊寺の版木（平成22年度の調査）  
写真図版
  
- 2 佐名伝遺跡（平成21年度の調査）…………… 26
  - 調査にいたる経緯
  - 調査の成果
  - ア 調査の方法
  - イ 基本層序
  - ウ 出土遺物
  - まとめ

付 佐名伝遺跡出土土器片の顔料分析について(奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義)  
写真図版
  
- 3 槇ヶ峯古墳（平成21年度の調査）…………… 37
  - 調査にいたる経緯
  - 調査の成果
  - ア 現状と調査の方法
  - イ 調査の概要
  - まとめ

付 吉野郡内の横穴式石室墳(平成22年度の調査)  
写真図版
  
- 関連地図・大淀町内の指定文化財一覧…………… 47
  
- 抄録・奥付

# 図 版 目 次

挿図	図 1	佐名伝遺跡 平成 21 年度調査区的位置図・調査区平面図および断面図
	図 2	槇ヶ峯古墳 平成 21 年度測量調査平面図・段面図
	図 3	関連地図

カット写真	CUT 1	放光する樟（現光寺縁起絵巻 上巻より）
	CUT 2	史跡比叢寺跡（世尊寺山門 南より）
	CUT 3	絵巻の調査風景（於 世尊寺）
	CUT 4	放光仏の造像（現光寺縁起絵巻 上巻より）
	CUT 5	版木（平成 22 年度追加調査分）
	CUT 6	版木の調査風景（於 世尊寺）
	CUT 7	槇ヶ峯古墳 近景（南西より）
	CUT 8	槇ヶ峯古墳 測量風景（東より）
	CUT 9	槇ヶ峯古墳 墳丘測量時の様子（南西より）
	CUT 10	槇ヶ峯古墳 石室近景（南より）
	CUT 11	槇ヶ峯古墳 石室内の石棚
	CUT 12	石神古墳（南より）
	CUT 13	保久良古墳 石室内から入口をみる（西より）
	CUT 14	正福寺古墳 石室奥をみる（南西より）
	CUT 15	岡峯古墳 石室内の石棚（西より）
	CUT 16	稻荷山古墳（南より）
	CUT 17	林垣内古墳（南より）
	CUT 18	堂山古墳（南より）

写真図版	PLATE 1	現光寺縁起絵巻 体裁 1
	PLATE 2	現光寺縁起絵巻 体裁 2
	PLATE 3	現光寺縁起絵巻 上巻 1 詞
	PLATE 4	現光寺縁起絵巻 上巻 2 絵
	PLATE 5	現光寺縁起絵巻 上巻 3 絵 および 下巻 1 詞
	PLATE 6	現光寺縁起絵巻 下巻 2 詞 および 絵
	PLATE 7	現光寺縁起絵巻 上巻 3 絵
	PLATE 8	世尊寺の版木 1 写真および拓本 1
	PLATE 9	世尊寺の版木 2 写真および拓本 2
	PLATE 10	佐名伝遺跡 1 工事立会調査の記録
	PLATE 11	佐名伝遺跡 2 土層断面の記録および出土遺物
	PLATE 12	佐名伝遺跡 3 出土遺物
	PLATE 13	佐名伝遺跡 出土土器と顔料付着部分の蛍光 X 線スペクトル 1
	PLATE 14	佐名伝遺跡 出土土器と顔料付着部分の蛍光 X 線スペクトル 2
	PLATE 15	吉野川を望む（北から）・槇ヶ峯古墳（真上からみる）

表	表 1	比叢寺の沿革略史
	表 2	世尊寺の版木一覧
	表 3	佐名伝遺跡出土土器の分析結果
	表 4	吉野郡内の横穴式石室墳一覧
	表 5	大淀町内の指定文化財一覧

# 調査報告



CUT 1 放光する樟（現光寺縁起絵巻 上巻より）

# 1 現光寺縁起絵巻（平成19年度の調査）

## 調査に至る経緯

大淀町比曾・世尊寺は、曹洞宗に属し、寛延 4（宝暦元年・1751）年、大道寺雲門即道による開基とします。しかし、その前史として、飛鳥時代以来、当地に約 1000 年以上の間存在していた寺院の歴史の変遷が、多くの人々により考究されています。

世尊寺の創建以前は、この寺院を比蘇（曾）寺、現光寺と称し、江戸時代には、その住古の伽藍を復興させようと、さまざまな運動があったようです。現光寺とは、平安時代から江戸時代の 18 世紀前半代にかけて使われた寺号です（以下、総称して「比曾寺」と呼称）。

平成 18(2008)年 10 月 20 日付けで、所有者である世尊寺より、現光寺縁起絵巻上下 2 巻を、大淀町指定文化財とするための申請が提出されました。町教委ではこの申請をうけて、その文化財としての評価を行うことを目的として、詳細調査を計画・実施しました。ここではまず、比曾寺の概要と、これまでの調査・研究史を整理しておきます。

## 【比曾寺の沿革】

比曾寺の創建は不明ですが、『現光寺縁起絵巻』では聖徳太子建立 46 ヶ寺院のうち「冠首三ヶ寺（四天王寺、法隆寺、比蘇寺）」の一とします。

奈良時代の 8 世紀前葉頃、当寺には「吉野僧都」と呼ばれた高僧・神叡（しんえい）(-737)が庵を結びます（『扶桑略記』所引「延暦僧録」神叡伝）。『日本書紀』の欽明紀 14 年条に登場する「吉野寺」と放光樟像伝承の記載には、この神叡が関与しているとみられています。奈良時代の比曾寺には塔が建っており、神叡は、懸仏状の虚空蔵菩薩に紐をとりかけて、それを引きながら修行したと伝えます（『今昔物語集』）。

また、法隆寺献物（東京国立博物館蔵）のうち、奈良時代の「銀製鍍金龍首水瓶」は、「比曾丈六貢高一尺六寸」（高さ 48.5 cm）と読める墨書があり、神叡の時代に相当する比曾寺の遺品として、戦前より耳目を集めています<sup>(1)</sup>。

8 世紀中頃には唐僧の道璿（どうせん）(702-760)が入寺し（「延暦僧録」道璿伝等）、比蘇寺は山寺としての性格をいっそう強め、自然智宗と呼ばれる、虚空蔵菩薩求聞持法による修行の拠点（密教修行場）として機能していました。

弘仁 13（822）年成立とされる『日本霊異記』推古 3 年条には、放光樟像伝承に類似する、沈水香の流木で作った観音の伝承が記されています。ここでは、紀伊国名草郡の大部屋栖古連（おおとものやすのこのむらじ）という人物が、比蘇寺に放光樟像を安置した、聖徳太子の弟子の一人として登場します。また、承平 7（937）年撰とされる醍醐寺所蔵『聖宝僧正伝』には、「吉野川の渡し」をひらいた聖宝（～909）が、弥勒と文殊菩薩の像を当寺に安置したと伝えます。その後当寺は、密教修行場としての性格を薄め、昌泰元（898）年 10 月の宇多上皇による竜門・宮滝行幸（『扶桑略記』）、寛弘 4（1007）年 8 月の藤原道長による金峯山参詣（『御



CUT 2 史跡比曾寺跡（世尊寺山門 南より）



表1 比叢寺の沿革略史

時代	和暦	西暦	内容
古墳	欽明14	553	はじめて仏像二軀をつくる。今の吉野寺放光樟像なり(紀)
	敏達	6c後	菩薩三体を作る。吉野ヒソ寺に安置(日本霊異記)
	用明2	587	聖徳太子創建(現光寺縁起絵巻)
飛鳥	推古3	595	沈水香により観音菩薩を作り、吉野比蘇寺に安置(聖徳太子伝暦)
	天智	7c後	役小角修行(寺伝)
奈良	和銅～養老	8c初	神叡、止住(延暦僧祿・扶桑略記所引)
	天平勝宝末～天平宝字4	8c中	道璿、止住(延暦僧祿・元亨釈書)
平安	元慶4	880	「現光」(日本三代実録)
	昌泰元	898	宇多上皇、現光寺参詣(扶桑略記)
	～延喜9	9c末～10c初	聖宝、弥勒・地藏を造立(聖宝僧正伝)
	寛弘4	1007	道長、現光寺参詣(御堂関白記)
中世	弘安2	1279	金峯山寺・春豪による再興(現光寺縁起絵巻)
	延元2	1337	後醍醐天皇行幸(現光寺縁起絵巻)
	明德2	1391	「現光」(西大寺諸寺末寺帳)
	明応5	1496	「塔二基、中央有楼門、件額云栗天八一」「本尊観音」(実隆公記)
	文禄3	1594	秀吉、三重塔を伏見へ移建(多門院日記)
	慶長6	1601	家康、伏見の三重塔を三井寺へ寄進
江戸	寛永9	1632	興福寺末寺帳に記載あり
	寛永10	1633	現光寺塔一基あり
	延宝8	1680	京都仏光寺にて開帳「世尊寺」初見(堯恕法親王日記)
	享保7	1722	太子堂建立(享保七年銘瓦)
	寛延4	1751	雲門即道、曹洞宗靈鷲山世尊寺として開山
	明和5	1768	「和州吉野郡比蘇邑靈鷲山世尊寺大樹代置焉」銘雲版
近代	明治14	1881	本堂焼亡
	大正5	1916	仮本堂として再建
	昭和2	1927	「比叢寺跡」史跡指定
	昭和12	1937	仮本堂焼亡
	昭和43	1968	本堂再建

本表の作成にあたっては、大淀町教育委員会編「比叢学事始」2006年を参照した。

堂関白記』)の記事に現れるような、京都から宮滝・吉野山(金峯山)への経由寺として機能していました<sup>(2)</sup>。

弘安2(1279)年、金峯山寺の春豪と、西大寺の高僧・叡尊の弟子・本空坊が、当時衰微していた伽藍を、真言律宗寺院として復興し、延元2(1337)年には後醍醐天皇(延元4年没)の行幸があったと伝えます(『現光寺縁起絵巻』)。当寺が後醍醐天皇から「栗天奉寺」の寺名を賜ったとする伝承(『太子伝玉林抄』)もこの行幸に由来するものです。

比叢寺は当時(南朝の興国年間)、後醍醐天皇の護持僧・小野文観に代表される修験道集団の拠点の一つとなっていました<sup>(3)</sup>。文観は普賢延命法をきわめ、当寺の約5km西方(大淀町岩壺)に比定される「和州岩壺弁財天」で、弟子にこの修法を伝授したといひます。それから50年ほど経た明徳2(1391)年9月28日の記録(『西大寺諸国末寺帳』)では、比叢寺が西大寺の末寺となっていたことがわかります。

三條西実隆(1455-1537)の日記『實隆公記』明應5(1496)年条によると、「現光寺」は壮大な伽藍を有していました。日記に記す「塔二基」の記述から、東西に双塔の並び立つ伽藍が想定されています<sup>(4)</sup>。その後、戦国の世を経て織豊期には再び衰微していたようで、文禄3(1594)年9月20日には、豊臣秀吉により三重塔(東塔)の伏見(伏見城)への移築がおこなわれました(『多聞院日記』)。この塔は、その後大津市の三井寺(園城寺)へと移され、重要文化財として今に伝わっています<sup>(5)</sup>。

これ以後の比叢寺の変遷については後述(12-15頁)しますが、明治24(1891)年6月20日付「寺院明細帳 吉野郡大淀村大字比叢世尊寺」によると、明治14(1881)年7月16日、火災による本堂の焼失が occurred。その後、明治18年(1885)3月には、関係者の努力により復興の資金が調達され、明治23(1890)年、伽藍再建に着手。やがて、大正5(1916)年の仮本堂再建(吉野町の龍門寺より移築と伝える)に結びつきます。

ただし、この仮本堂も昭和12(1937)年に焼失。この火災で、木造地藏菩薩立像をはじめ多くの文化財が失われました。なお本堂は戦後、境内の杉の巨木を材となして、昭和43(1968)年に再建されて現在にいたっています<sup>(6)</sup>。

## 【研究略史】

明治期から昭和初期にかけ、比叢寺を紹介した刊行物はありましたが、それは、古代から近世の文献史料で比叢寺の伝承をとりあげたものでした<sup>(7)</sup>。比叢寺の本格的な研究は、奈良県内で史跡指定のための調査が行われるようになった大正期に、現地の考古学的な踏査から始まります。

比叢寺は、当時の史跡調査を担当した天沼俊一・上田三平らの報告によると、南北にのびる直線的な古代伽藍の礎石を残す、奈良県内でも有数の寺院跡として注目されていました<sup>(8)</sup>。そして、上田により境内全域が測量され、採集された古瓦の拓本等もはじめて報告されました。この調査成果を受け、はれて昭和2(1927)年、境内地約25,104㎡は「史跡比叢寺跡」として史跡指定のはこびとなりました<sup>(9)</sup>。またこれと並行し、当時の世尊寺住職であった上田萬鏡が、大正15(1926)年に寺宝の写真入り小冊子を刊行しています<sup>(10)</sup>。

その後、古代寺院研究の第一人者である石田茂作が、当寺の古代伽藍跡とされる礎石群の実測図を作成し、古瓦についても再度詳細な検討を行っています<sup>(11)</sup>。このなかで石田は、古瓦の最古年代を白鳳期(7世紀後半)以前と位置づけ、当時(昭和初年時)の伽藍跡に古代伽藍の痕跡をみとめながら、その古代の寺域を「一町(一辺約120m)四方」と想定したうえで、当初、塔が東に、金堂が西に並ぶ「法起寺式」の伽藍配置であったものが、白鳳期になり、金堂跡へ

塔（西塔）が造られ、二塔が東西に並ぶ薬師寺式伽藍配置に整備された、との見解を提示しました。

王寺出身の郷土史家・保井芳太郎も同様に、採集された古瓦の検討を行い、当寺院の最古年代を白鳳期にもとめています。また、自身の比叡寺採集瓦の中にあつた、岡寺式の複弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代前半ごろ）が、斉明～聖武朝の「吉野宮」と目される史跡宮滝遺跡（吉野町）でもみついていることに着目し、両遺跡の関係性を指摘しています<sup>(12)</sup>。

1950年代前半におこなわれた吉野川流域の総合調査は、吉野地域の文化財調査・研究を格段に進展させました。この成果は『奈良県総合文化調査報告書』としてまとめられましたが、これにより、吉野郡内の文化財を含め、比叡寺に対する認知も、多いに深まりました<sup>(13)</sup>。

またこの時期、福山敏男、堀池春峰らによる、文献史学からの当寺の検討も飛躍的に進みました<sup>(14)</sup>。とくに、先の総合調査とあわせて進められた堀池の研究では、創建期における渡来系氏族（東漢氏系）の関与から、奈良時代に高僧たちの止住する密教修業場へと変質してゆく経緯までが明らかにされ、古代氏族の研究と、初期仏教の研究においても、当寺は一躍脚光をあびるようになりました。園田香融は、当寺を端緒とする初期密教（雑密）の自然智宗をとりあげて論じ、これにより宗教史上の当寺の位置も明確となりました<sup>(15)</sup>。小川光暘は美術史の立場から、当寺の放光樟像の霊木伝承について検討を加え、初期仏教の特色とされる霊木信仰の文化史的な視野をひらきました<sup>(16)</sup>。

1970年代には、吉野郡内の町村史編纂がピークを迎え、『大淀町史』の比叡寺の項にも従来の研究成果がもりこまれ、一般的な比叡寺研究の到達点がひろく知られるようになりました<sup>(17)</sup>。

昭和54（1979）年、竹居明男は文献史の立場から、『日本書紀』の欽明紀14年条の記事（先述）に注目し、初期仏教における「放光樟像縁起」の伝承が、かたちを変えながら後世に伝えられてゆく過程を詳細に検討しています<sup>(18)</sup>。昭和55（1980）年、宮坂敏和は、蘇我本宗家が滅亡した後の大化元（645）年、「吉野太子」とも称された古人大兄皇子（ふるひとのおおえのおうじ）の吉野潜入記事に注目し、それに加担した蘇我系氏族の田口臣（たぐちのおみ）をとりあげ、その根拠地を通説の高市郡内ではなく、吉野郡大淀町田口の地（比叡寺の西北部にあたる）にもとめながら、付近一帯に古人大兄を擁護する体制が整えられていたと考えました<sup>(19)</sup>。

昭和59（1984）年、達日出典は、奈良時代になって吉野山（金峯山）へと広がってゆく、密教修行の嚆矢としての「比蘇山寺」の成立に注目しました。宮家準も、修験道研究の始原としての当寺に注目し、近江昌司もまた、山岳寺院の考古学的な研究から、郡寺的な性格を含む初源的な「山林寺院」として、当寺を位置づけています<sup>(20)</sup>。当寺を、密教修行の「山寺」とする近年の評価も、これら一連の研究成果の潮流に位置づけられます<sup>(21)</sup>。

福塚忠司は、平成19（2007）年の論考で、比叡寺創建氏族の候補となっている東漢氏系のなかでも、『新選姓氏録』に記す、大和国吉野郡、紀伊国伊都郡などに居住していた氏族・文忌寸（ふみのいみき）（古人大兄の支援者であった倭漢文直麻呂に系譜をもつ）に注目しました。また福塚は、神叡の比叡寺在在年について詳しい分析を行い、藤原京遷都後の持統8（694）年から和銅7（714）年までの20年間と結論づけています<sup>(22)</sup>。また増田早苗は、『今昔物語集』の検討を通じて、当寺の創建、初源的な虚空蔵菩薩信仰の背景について、思想史研究の立場から検討を深めています<sup>(23)</sup>。

以上は、主として文献による寺院史研究ですが、関連する世尊寺所蔵文化財の調査・研究も進められています。

昭和29（1954）年2月に、胎内文書14点の調査が実施された木造十一面観音立像（奈良県指定文化財）について、井上正は平安時代に下るとされていた従来の年代を引き上げ、神叡の

時代に相当する奈良時代前半期の造像と想定していましたが、平成17(2005)年、奈良国立博物館の特別展『古密教』への出展を契機に再調査が実施され、奈良時代の制作と位置づけられました<sup>(24)</sup>。

また、平成元(1989)年以降、財団法人元興寺文化財研究所により、後述のように享保年間から明治20年代の寺院復興運動にかかわる版木が調査されています<sup>(25)</sup>。

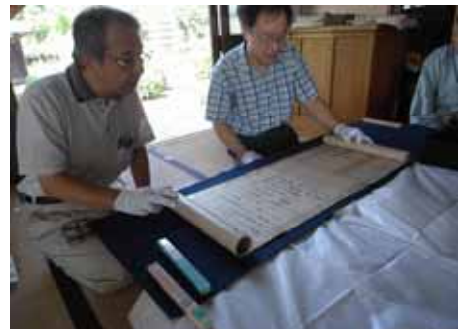
今回詳細調査を行った現光寺縁起絵巻については、現時点では江戸時代前半期の延宝から享保年間の制作と考えられますが、吉原浩人は、日本最古の釈迦三尊像を拝する長野県の秘仏・善光寺如来の伝承が、鎌倉時代頃には比叡寺(現光寺)に存在した「現光寺縁起」に拠ったものとの見解を提示しています<sup>(26)</sup>。

史跡内の発掘調査については、すでに公にされている報告がありますので省略します<sup>(27)</sup>。

## 調査の成果

### ア調査の方法

現光寺縁起絵巻の詳細調査については、大淀町文化財保護審議会臨時委員(平成19年11月1日～平成20年2月28日)を下記の研究者に委嘱し、世尊寺の協力のもとで、平成19年9月18日～2月28日の日程により詳細調査を行いました。



CUT 3 絵巻の調査風景(於 世尊寺)

#### 【調査者】

- ・高橋平明(元興寺文化財研究所人文科学研究室 室長)  
専門は中世・近世の信仰文化に関する研究。『元興寺極楽坊縁起絵巻』『板絵智光曼荼羅』『三輪山縁起』をはじめとした「奈良地域関連資料画像データベース」の集成を進めておられます。
- ・竹居明男(同志社大学文学部教授)  
専門は文献史学。特に日本古代・中世文化史の研究、菅原道真伝および天神信仰の諸問題についての研究が著名です。比叡寺については「『吉野寺縁起』の史料性をめぐって-欽明紀十四年五月戊辰朔条を中心に-」(『日本書紀研究』第十一冊 1979年)と題した長大な論考があります。

なお、この調査に先立ち、平成19(2007)年4月16日には、奈良県教育委員会文化財保存課(神田雅章・佐藤大)による記録調査が行われました。大淀町としてもこの成果を参照しながら、より詳細な観察と、関連資料の精査を実施しました。

### イ 調査の概要

以下は、高橋平明委員による調査結果の報文および釈文です。

#### 【書誌的概要】

紙本著色 卷子装 上下二巻  
脚付黒漆塗箱入り

【題 箋】「現光寺縁起 上」「現光寺縁起 下」 金泥縁取

【上巻内題】「栗天八一山現光寺縁起」

【蓋 表】金泥書「現光寺縁起 二巻」

【表 紙】雷文繫地八重梅文金欄

【見返し】草花文形金箔押紙  
【詞書料紙】金界線引 金銀泥霞  
【料紙裏面】金銀砂子・切箔・野下  
【軸端】八角金銅製  
（小口面は魚々子地に蓮華文を陰刻）

【法量】上巻 紙高：35.0 全長：895.8  
下巻 紙高：35.1 全長：943.0  
一紙長：約 50 （単位cm）

【詞・絵構成】上巻 詞：六段 絵：六段  
二十二紙（表紙・奥見返し含む）  
下巻 詞：七段 絵：六段  
二十二紙（表紙・奥見返し含む）  
序・詞書は漢字かな交じり 一行十六字前後



CUT 4 放光仏の造像  
（現光寺縁起絵巻 上巻より）

## 【絵巻の梗概】

### 《上巻》

#### 序

栗天八一山現光寺縁起の濫觴は、聖徳太子を開基として、日本における仏像最初の彫刻となる樟木像の釈迦・観音菩薩ならびに沈水香の観世音菩薩を安置する伽藍である。

#### 第一段

欽明天皇十四年、梵音を奏でて光を放つ樟木が茅渟海を漂流しているとの報告が和泉国より天皇になされる。

#### 第二段

勅使として派遣された屋栖野古連は、沖に漂う樟木を引揚げて都に持ち帰り、その霊瑞を天皇に奉聞する。

#### 第三段

天皇はこの霊木で何を造るべきか、五十太神と三輪太神とに占わせたところ、ともに仏像に造るべきことを託宣される。

#### 第四段

天皇が仏像を造ることを命ずると天下には疫病が流行した。物部尾輿と中臣鎌子とは、これを天皇が異域の法に帰依したために我国諸神が怒りをなしたものとして仏教排斥を称えた。一方、屋栖野古連と蘇我大臣とは、池辺直氷田に命じて樟木から釈迦如来と観音菩薩とを造顕させ、大和国豊浦堂に安置すると天皇は厚くこれを信仰した。これら尊像が放光樟木から造られた当寺の本尊であり、日本で彫刻された最初の仏像なのである。

#### 第五段

樟木が二体の仏像となると天下の疫病は止み、人々は仏教をますます尊崇した。ところが、敏達天皇十四年、物部守屋連らは仏教排斥として豊浦堂に放火した。屋栖野古連と池辺直氷田とは両尊を堂から取り出して稲の中奥深くに隠したので焼失を免れた。

#### 第六段

用明天皇二年、聖徳太子は蘇我馬子とともに物部守屋を誅滅して仏法を大いに興隆した。樟木の両尊を稲の中から探し出したが不思議なことに傷みもなくて比蘇寺に安置した。比蘇寺とは、吉野寺のことであり、今の現光寺のことである。

## 《下 卷》

### 第一段

推古天皇三年、土佐国の南海に、毎夜、雷光のように光を発する「沈水香」という木があり、三十日後、淡路国の南の岸に漂着した。海人がこれを薪にすると、香薫が村里に満ち満ちて、この世のこととは思えないほどであったので、これを聖徳太子に献じた。

### 第二段

聖徳太子はこれを霊木の「沈水香」と見抜き、天皇が仏法興隆を志されたのに応じて、瑞木が我国に現れたのだと上奏した。そこで天皇は仏工鳥（止利仏師）に命じて十一面観音像に刻ませた。太子も自身の姿を刻して観音像の体内に納め、樟木の両尊と並べて比蘇寺に安置された。

### 第三段

聖徳太子が「栗天八一」の四字を書かれて寺額としたので後世には山号となった。「栗」は西の木であるので、西天より漂い来た木を意味するといひ、以下にそれらの字の由緒を述べる。また、比蘇寺とは、重病人も当寺本尊像の樟木の香気にふれるや忽ちに平癒して蘇生したことに拠り、清和太上天皇も帰依されたという。

### 第四段

現光寺とは、樟木・沈水香がともに海中に光を発して霊仏の威光を称美することによる。ある時、沈水香の観音像がいずこともなく姿を失したことがあった。その後かなりの年月を経て、伏見院の御宇、比曾の里に一人の老婆があり、仏法に帰依して興正菩薩の弟子であった西大寺の本空房に教化をうけていた。老婆が本空房に語るには、自宅に霊像を安置することを秘してきたのだが、どの尊像こそは比蘇寺の本尊であるので自分の命終の後には、必ず比蘇寺に戻して欲しいとのことであった。果たして本空房がその像を見ると聖徳太子の形姿であり、体中を探ると沈水香の御長一尺一寸の観音像が納められていた。本空房は直ちに敬信して、この像を比蘇寺に移安した。この像は秘仏として永らく拝する人はなかった。

### 第五段

古老の伝えによれば、太子像内の十一面観音像は、九面にして本面を加えて十面、さらに太子自身の一相を加えて十一面として当寺に安置されたものという。聖徳太子は観音菩薩三十三応化身のうちの小化身としてこの世に現じて仏法東漸をなされたのだ。

また、太子は四天王寺・比蘇寺・法隆寺を冠首として四十六の伽藍を建立された。当寺には金堂・講堂以下七堂伽藍が備わり、さらに東・西院以下の七院があった。五重塔は二基あり、一基は敏達天皇のために推古天皇が建立され、一基は聖徳太子が父の用明天皇のために建立されたものである。

### 第六段

このように当寺は由緒ある霊場であるので参詣者の絶えることはなく、清和天皇が行幸され、昌泰元年には宇多天皇が親王や菅原道真らの家臣らとともに立ち寄られた。後醍醐天皇も行幸されて「栗天奉寺」と揮毫され、勅願寺となったのである。

### 第七段

その後、当寺は大破に及び、弘安二年に至って金峯山から春豪聖人が入寺されて堂塔を再建され、西大寺の叡尊に付与して律院となり、法灯がよみがえることとなったのである。これを喜ばぬものがあるであろうか。

ここに国史・旧記の記事を集めて略して一巻の縁起としたものである。

## 【制作の背景】

放光木の漂着から現光寺の起こりを説き起こし、その再興を西大寺叡尊の弟子とされる本空

房や同末寺の律院とした春豪上人など、西大寺末寺としての現光寺を述べており、禅寺としての中興に言及しないことが注意される。このことは、本縁起が聖徳太子信仰に絡めながら、西大寺の末寺である来歴や事情を述べようとする意図を推測させる。

絵師や詞書の筆者、さらには制作年について奥書がないため、明確に知ることはできない。しかし、前記の内容からすれば、竹居明男が指摘した「堯恕法親王日記」延宝 8 (1680) 年 3 月 13 日条の記事が注目される(後述 12 頁)。すなわち、京都・仏光寺における当寺出開帳は当寺の復興を期してのものと思われる。すると、本絵巻は、この出開帳執行に合わせて制作された可能性が高いものと思われる。

伝統的に出開帳の開催にあたっては、京都における公家の後ろ盾があったはずであり、この点からも京都における絵師への取次・下命が推測される場所であり、同様な制作事情にあった制作年の近い絵巻の描法・表現などが、本絵巻に近似することは、これを裏付けるものと考えられる。具体的には、京狩野家の当主であった狩野永納(1631-97)の周辺に絵師が推測されるのではなかろうか。  
(財団法人元興寺文化財研究所 高橋平明)

### まとめ

この絵巻は、吉野郡最古の寺院である比叡寺(比蘇寺・現光寺)に伝わったもので、飛鳥時代の創建から、鎌倉時代の再興までの当寺の縁起が記されています。

上巻は、欽明紀 14 年条に端を発する伝承(光を放つ樟で作られた釈迦・観音像の由来)と仏像 2 軀が当寺に安置されるまでの由緒が語られています。下巻は、推古 3 年条に端を発する伝承(沈水香の流木で作られた十一面観音像の物語)を中心に、十一面観音を聖徳太子像の胎中に納めたこと、比蘇寺や現光寺の寺号、栗天八一の山号の由来、伽藍の様子、歴代天皇・上皇の行幸などが説かれています。

この絵巻には落款等がなく、制作年や作者についてはわかりませんでした。本絵巻は残りもよく彩色も鮮やかで、主題に特化したシンプルな描き方が特徴といえ、本報告で指摘したとおり、延宝 8 年に京都・仏光寺において行われた「吉野世尊寺」の出開帳に合わせて制作された可能性があります。また同時代の絵巻資料との比較から、京都の狩野派周辺の絵師によって描かれたと推定されます。

このように本絵巻は、17 世紀代に高まった当寺院復興の気運の中で、その勸進(資金調達等)を目的として制作された文化財と評価できます。また、文学・芸術作品としても、制作当時の吉野の風景、生活、人々の様子を知る手がかりとしても貴重なものといえます。

なお本絵巻は、この調査成果をうけて平成 20 (2008) 年 7 月 23 日に、本町で 8 番目の町指定文化財(有形文化財・絵画)となりました。この絵巻の調査にご尽力をいただきました竹居明男氏、高橋平明氏と、所有者である世尊寺住職・本山一路氏に、この場をかりてお礼申し上げます。

## 付 世尊寺の版木(平成 22 年度の調査)

### 調査に至る経緯

世尊寺の版木については、先述のように、財団法人元興寺文化財研究所による調査報告書が刊行されています<sup>(25)</sup>。これによると、調査された 48 枚の版木のうち、もっとも古い年号の記載があるものは、享保 10 (1725) 年の「大和國吉野郡比蘇寺鐘募縁序」(資料 5)で、ほかに江戸時代の年号を記すものとしては、享保 16 (1731) 年の「妙法蓮華経要文」(資料 14~16)

表2 世尊寺の版木 一覧

No.	名称	時代	特徴
1	地藏菩薩像	江戸	「吉野山子守」「子安地藏」「世尊寺」の文字がみえます。
2	役行者像	江戸	「比蘇寺」の文字がみえます。裏面には墨書で「世尊寺」(「比蘇寺」とあります。
3	比蘇寺略(縁起)	江戸	寺と仏像、聖徳太子、役行者の由来を記しています。虫食いが著しい。
4	栗天八一山比蘇寺畧縁起	明治	表裏にわたって比蘇寺(世尊寺)の縁起を記しています。明治22年5月。
5	比蘇寺躰鐘募縁序	江戸	太子堂の建立と梵鐘の新鑄にかかる勸進について記しています。資料中最も古い紀年銘(享保10年)をもつ版木。
6	金堂并太子堂建立観化袋	江戸	「比蘇 吉野寺」の文字がみえます。裏面は「吉野山迄ちか道の案内」。5と同様、享保年間前半期の版木。
7	勸進帳	江戸	「尾得菴誌」の名がみえます。裏面は世尊寺の用紙。
8	御供料篤志簿	明治	「おたいっさん」の御供料を記した帳簿鑑。裏面には「聖徳太子御堂」の図(明治21年5月)があります。
9	勸進帳	明治	明治22年11月、勸進に際しての緒言と住職・信徒惣代の名が記された版木。
10	本堂再造篤志簿	明治	本堂の再建にともなう帳簿に用いられた版木。「聖徳皇太子御手植への桜木」の文字がみえます。
11	聖徳皇太子御宝殿再営勸進牒	明治	大阪府(明治18年3月)、奈良県(明治22年3月)からの補助金通知を版木にしたもの。裏面に「宝殿」の図があります。
12	法謝表	明治	寄附をいただいた有志への処遇を記したもの(明治22年5月)。裏面は世尊寺の罫紙の版木。
13	法謝例則	明治	12よりも詳しいもの。文末に当時の住職・中津椿山の名がみえます。
14	妙法蓮華経要文(1)	江戸	14・15・16は一連の版木。聖徳太子の孝養像と「十六歳尊像 太子御自作」の文字がみえます。
15	妙法蓮華経要文(2)	江戸	文末に「享保十六稔(年)」「比蘇寺朴道秀拙㊦㊦」の落款がみえます。
16	妙法蓮華経要文 題箋	江戸	両面に「日本最初佛」の像。表の干支は癸酉、裏の干支は甲子で、表が正しいもの。
17	菩薩戒血脈図(1)	明治	17・18・19は一連の版木。世尊寺の行事で用いられたもの。
18	菩薩戒血脈図(2)	明治	17の続き。世尊寺の行事で用いられたもの。
19	菩薩戒牒	明治	「永平」(福井県の曹洞宗総本山・永平寺)の文字がみえます。
20	三社託宣	江戸	裏面には「三辨宝珠之法」とあり、印を結ぶ手順と方法が記されています。
21	一之行場懺悔禮拜文	明治	行場で唱える修験関係の礼拝文が記されています。
22	廻国六十六部行者	江戸	法華経を納経しつつ諸国66か所の霊場を巡る行者に関連する版木。裏は薬師如来の病よけ祈祷札。
23	祈祷札	近代	神道関係の祈祷札と考えられます。
24	大般若経転読祈祷札	近代	大般若経転読の際に用いたもの。
25	吉野郡比蘇寺(署名)	江戸	「行(役?)者 沙門 秀 村瀬伊左衛門」の署名。裏面に墨書「比蘇寺」。
26	守護符	江戸	「比蘇寺」の守護符です。
27	守護符	近代	「世尊寺」の守護符です。裏面に真言がみえます。
28	大施餓鬼供養米	江戸	施餓鬼に用いる札の版木です。側面に墨書「比蘇寺」。
29	守護符	昭和	養蚕にかかわる守護符。「世尊大寺」の文字がみえます。裏面に墨書「昭和二年...世尊十八世萬鏡代」の文字。



表2 世尊寺の版木 一覧

No.	名称	時代	特徴
30	開帳佛餉袋	江戸	「おびとけの西今市隆興寺」で行われた出開帳の佛餉袋の版木です。
31	開帳佛餉袋	江戸	大坂・生玉社で行われた出開帳の佛餉袋の版木です。30と違い「日本最初佛」が加わっています。
32	各種佛餉袋	江戸	表には「比蘇寺 常念佛・千日廻向佛餉」、裏には「比曾村現光寺 開帳佛餉」の文字がみえます。
33	日本最初放光樟像 佛餉袋	江戸	「和苧吉野 栗天八一山 現光寺」の文字がみえます。
34	祈祷札	近代	「謹祈祷」の文字。
35	「地蔵流し」案内	近代	日支戦役(日清戦争:明治27~28年)戦死者の英霊供養の案内。
36	大法會供養袋	昭和	「ヨシノヒ世尊寺」の文字がみえます。裏面に墨書「昭和十三年四月之彫」。
37	奉納経	近代	裏面に墨書「和州 比曾村 世尊寺」と「顔文字」「坊主」の落書き。
38	奉納経	明治	「大淀村比蘇 世尊寺」の文字がみえます。大淀村誕生は明治22年4月。
39	聖徳太子大會式	大正	「新四月二十二日」の文字がみえます。
40	道元箸	近代	寺にちなんだ箸袋の版木です。
41	御供物	近代	供物用札の版木です。
42	太子奇法通明丸・吉野寺	江戸	聖徳太子ゆかりの「通明丸」の効用が列記されています。
43	通明丸	江戸	「通明丸」の効用。文末に「比蘇寺」とみえます。
44	愛国護法	明治	表に「伏見文秀宮御染筆 愛国護法」、裏に「明治二十一年六月 前圓照最勝心院宮文秀」とあります。
45	常燈図	昭和	青銅製の燈籠を描いたもの。
46	発起人(署名)	明治	明治中期の伽藍復興に際しての発起人とみられます。
47	御朱印	明治	「日本最初 聖徳皇太子 奉佛霊場」の文字がみえます。
48	世尊寺罫紙	明治	「大和國比曾世尊寺」の文字がみえます。
49	比蘇吉野寺 太子観音之尊像	江戸	聖徳太子像とその胎内仏(胎中観音)に関する版木。
50	各種佛餉袋	江戸	裏面に「八月十日より云々」の文字。
51	<b>吉野寺造営寄附牒</b>	江戸	裏面に墨書「靈鷲山 尊」の文字。「靈鷲山」山号の初出を考える資料。
52	太子観音之尊像	江戸	49の縦長版。
53	靈鷲山	近代	裏面に「上」を示すマークあり。
54	守護符	明治	「観世音開運守護」の文字。裏面に「福寿豆 世尊寺」の文字。
55	霜月十三日	明治	霜月は11月。右側面に「ひそ村 世尊寺」の文字。
56	尊像図	明治	本尊、観音、太子の像と世尊寺の由来がみえます。
57	皇太子宝殿再建領収書	明治	明治の伽藍復興にともなう版木です。

太字(ゴシック)は特に注目される資料。

参考文献:『世尊寺の版木』財団法人元興寺文化財研究所(平成17年)

があります。江戸時代の版木は、すべてではないですが、「蘇」の魚扁が右側に表わされる字体（蘓）に特徴があります。また、明治 18～22（1885～1889）年の版木（資料 4、8、9）など、焼失した本堂の再建にかかわる資料も確認できます。その他、紀年銘のない資料も、当寺の復興運動にかかわる版木が多く含まれています。

今回、平成 22（2010）年 7 月～11 月の期間で版木の追加調査を実施しました。その結果、新たに 9 点の未調査の版木等がみつかりました。したがって、世尊寺の版木はあわせて 57 点となりました。



CUT 5 版木（平成 22 年度追加調査分）

### 調査の成果（PLATE 8・9）

新たに確認できた版木（資料 49～57）には、年号の入ったものはありません。しかし、その書体から、江戸時代の一群、江戸時代以降の一群にわけることができます。注目されるのは、に含まれる「和州吉野寺造営寄附牒」（資料 51）の裏面の墨書「靈鷲山 尊」です。「世尊寺」の名称がいつから使用されているのか、これまでは不明な部分も多かったのですが、この資料は「吉野寺」の呼称が用いられた頃、「靈鷲山（世）尊」という構想があったことをうかがわせます。同様に、元興寺文化財研究所調査分の「役行者像（印刻は大峯路分之法像 和州吉野郡比蘇寺）」（資料 2）の裏面には、細筆の「比蘇寺」の上から大きく「世尊寺」と書き足されています。この二例は、当寺の寺号「世尊寺」の萌芽が、雲門の開山を遡る可能性を示す資料といえます。



CUT 6 版木の調査風景（於 世尊寺）

以下では、現光寺縁起絵巻と版木の調査から判明した、比蘇寺から世尊寺への変遷とその実態について、時代をおってまとめておきます。

### 【延宝年間（17 世紀後半）】

当寺は、寛永 9（1632）年 11 月には興福寺の末寺となっていました（『興福寺末寺帳』吉野郡）。すでに東西の双塔も失われ、かつての伽藍は面影すら残されていなかったとみられます。世尊寺墓地内の石塔に「延宝四丙辰年 妙如信尼 四月十一日 施工 大坂屋 太郎」の銘をもつ墓石があります。この延宝 4（1676）年の墓石は女性の戒名を表しており、当寺との関係は不明瞭ですが、このころ、当寺に墓地が営まれていたようです。また、林宗甫の著す『大和名所記-和州旧跡幽考-』「第十一卷 芳野郡」の項では、延宝 7（1679）年の事として、当寺の境内の荒れ果てた様子が記されています。

その翌年の、延宝 8（1680）年 3 月 13 日、「堯恕法親王日記」（『妙法院史料』第 2 巻）には、京都の仏光寺で「吉野山世尊寺之仏像」等の出開帳があったことを記します。

その出開帳の項目をあげると、釈迦（「長七尺計也、是日本仏像之最初也」）、大將軍像、子守ノ地藏、役小角、聖徳太子像（三歳像・十六歳像）、蔵王権現像（長二尺五寸計）、天照太神像（木像）、後醍醐之御笛（二管）・笙（二管）、護良親王陣羽織、となります。はおそらく立像で高さ 2m 前後。「是日本仏像之最初也」とあることからみれば、上記は比曾寺（比蘇寺もしくは現光寺）の復興にかかわる出開帳と想定され、竹居明男はこの記事を当寺

にかかわる「世尊寺」の名称の初出とみています<sup>(18)</sup>。また、「吉野山」「世尊寺」の文字を記す「地蔵菩薩像」(資料 1: PLATE8-57)も、 とのかかわりを示唆する貴重な版木といえます。

ところで、吉野山の水分神社から坂道をやや下った子守の集落に、平安末～鎌倉前期の梵鐘(三郎鐘)を有する鐘楼が残っています。この付近が明治 8(1875)年に廃寺となった「世尊寺跡」とされ、延享 2(1745)年ごろには釈迦堂が建っており、その本尊は鎌倉末の 13 世紀後半に遡る像高 2.09m の釈迦如来立像(奈良県指定文化財・現在金峯山寺蔵王堂内に安置)であったとされます(吉野町史編集委員会 編「三 美術工芸 1 吉野町の彫刻 一、吉野山の彫刻」『吉野町史下巻』1972 年。奈良県教育委員会「木造釈迦如来立像」『奈良県指定文化財 平成 15 年度版(第 45 集)』2005 年)。像高がほぼ一致し、文頭に「吉野山」と記す点からも、の釈迦は吉野山の世尊寺の旧本尊に該当するとみて間違いありません。

これらの資・史料、文化財と世尊寺に残された版木のあり方は、吉野山の古刹・世尊寺の法灯が、当時の比叡寺の復興運動に統合、継承されようとした事情を反映していると考えられます。仮に想定するならば、すでに荒廃の激しかった比叡寺復興の出開帳にあたり、伝承にある放光伝承の釈迦像を探し求めた結果、吉野山世尊寺の釈迦像が候補に挙がったということなのかもしれません。

また、世尊寺に伝わる現光寺縁起絵巻も、京都の寺社・公家と京狩野派の絵師たちを巻き込んだ出開帳をきっかけに制作されたと考えられるものです。落款が押されず未完成で終わった現光寺縁起絵巻のあり方に窺えるように、この延宝の出開帳は、吉野の寺社がかかわっているということ以外、その主体も不詳で、当寺の伽藍の復興には直接つながらなかった可能性が高いといえます。

### 【元禄年間(17世紀末)】

世尊寺の住職でもあった上田萬鏡がまとめた大正 15(1926)年の『世尊寺沿革史略』によると、元禄年中入寂の高心が残した『靈會日鑑』(過去帳)に「栗天八一山現光寺住持高心」の記載があるといい(P16)。これは「和叡吉野 栗天八一山 現光寺」の文字がある佛餉袋の版木(資料 33)との関連が窺えます。また同書には、高覚なる人物が「本堂の修復」を行い、享保のころ瑞呈という人物が「再建修復」したとの記事もみえる、としています(P52)。この高覚については、世尊寺に残る木造十一面観音立像(奈良県指定文化財)の胎内文書の記載から、寛文年間(1661 - 1673)に大御輪寺(かつて桜井市三輪の地に所在)の真言律僧であった事が分かっています。なお、この木造十一面観音立像は、高覚らによって修理がおこなわれ、その後大御輪寺から当寺へ招来された可能性があります(『現光寺縁起絵巻』や諸版木に記す、太子像中に納めたとする「沈水香の十一面観音」は、当時すでに所在不明となっていた可能性があります)。

このように、当寺の元禄の復興運動を支えたのは、高覚に代表される真言律宗系の僧たちであったと想定でき、実際に幾度か出開帳や勧進も行われたと推測されます(資料 30～33はこの時期の出開帳にかかわるものとみられます)。しかしその復興は、おそらく本堂(講堂)の補修等を目指したもので、伽藍全体の整備にはいたらなかったようです。

### 【享保年間(18世紀前半)】

世尊寺墓地内の石塔に「享保二十丁(本来は乙)卯六月十二日 前總持保壽十四世當寺曹洞開基朴道秀拙大和尚禅師 住蘓山九年七十二歳示寂」の銘をもつ墓石があります。これによると、禅師・朴道秀拙は、享保 11(1726)年に 63 歳で入寺し、享保 20(1735)年に 72 歳で没してい

ます。となると、享保 10 年の版木「大和國吉野郡比蘇寺鐘募縁序」(資料 5)は、その末行にあるとおり「謙」なる人物が作成したもので、その翌年に秀拙が入寺して後、「妙法蓮華経要文」(資料 15)等が作成されたと考えられます。

また、資料 5 には「先師近年建立の願を起こし」云々と、当寺の太子堂の造営にふれた箇所があります。「謙」の先師にあたる人物が、太子堂の建立(もしくは復興)にかかわったことを示す一文ですが、太子堂には、享保 7・9(1722・1724)年の銘をもつ瓦が使用されており、先の一文を裏付けています。これ以降、当寺の太子信仰の拠点となってゆく太子堂の建立、さらに梵鐘の新鑄(鐘楼の建立等)をおし進めたのが、この享保年間の僧たちでした。現在当寺の鐘楼に残る梵鐘は、紀年銘こそありませんが、その形状や特徴からも、享保 10(1725)年の版木(資料 5)に示す鐘そのものと考えられます。

ところで、享保 16(1731)年の年号が文中にみえ、同 17 年、阿覚による追記がある「比蘇寺縁起」(世尊寺蔵)には、文中冒頭に「靈鷲山世尊寺縁起」とあります。阿覚は、その名前や「比蘇寺縁起」の内容からみて、真言律宗系の僧侶であったと考えられます。阿覚(真言律)と秀拙(禅)の子弟関係等は不明ですが、いずれにせよ秀拙の晩年期には、太子信仰を含めた「世尊寺」としての復興構想が確立されていたとみられます。そして、当寺に残された江戸時代の版木の大半も、この享保の復興期の制作とみられます。

### 【寛延年間(18世紀中ごろ)】

このように、伽藍の整備が享保年間の後半期にほぼ整った段階で、復興に関する運動はいったん落ち着いたかのようなのですが、『世尊寺沿革史略』によると、寛延年間に「往古の山号寺号靈鷲山世尊寺」といった文書記録が散見されるといい(P17)、この状況のなかで、寛延 4(宝暦元・1751)年、雲門即道による禅宗寺院としての開山を待つこととなります。上記の「往古」という表現が、いつの時代を指すのかは不明ですが、延宝年間に始まる復興運動の背景には、すでに「靈鷲山世尊寺」の構想があったという事を、暗にほのめかしたのかもしれない。

### まとめ

江戸時代の当寺の復興運動を、版木や関連資料とともにふりかえってきました。曹洞宗寺院としての「世尊寺」は、幾多の運動の断絶を経ながらも、真言律と禅の僧侶たちを中心とした約 70 年間にもわたる復興運動を实らせ、京都の文人や絵師をはじめとする匠たちをも巻き込んだ協働体制で復興を遂げた事がわかります。その背景には、古代寺院の流れをくむ律院としての性格をあわせもった禅寺という、当寺の複雑な信仰体系が窺えます。

この信仰体系は、明治 14(1881)年の本堂焼失に端を発した復興運動(明治 14 年～大正 5 年)にも受け継がれています。資料 56(PLATE 9-71)は、この禅宗寺院が、禅寺でありながら釈迦・観音・聖徳太子の三聖仏からなる霊場であることを強調するために作られたものであり、まさに世尊寺の歩んだ歴史を象徴しています。

追加調査の結果として、確実に享保年間より古い年号の入った版木は確認できませんでした。享保年間以前に遡ると想定される版木(2・51 など)は複数確認できました。これにより、江戸時代に行われた比叡寺(世尊寺)の具体的な復興運動の様子が、より明らかとなりました。世尊寺に残されている現光寺縁起絵巻と版木は断片的ではありますが、当寺の由来や伽藍の復興運動、江戸～昭和初期にかけての吉野の信仰文化の様子を物語る貴重な文化財の一括資料として、また、所有者により良好な状態で保管されている文化財として、大きな意義を有

しています。

また、版木に記す明治・大正期の復興運動は、その後の昭和 2 (1927) 年の国史跡指定 (比曾寺跡) への布石になってゆきますが、惜しくも昭和 12 (1937) 年、本堂焼失 (現本堂は昭和 43 年再建) にともない、数多くの貴重な文化財が焼失・紛失しました。

再びこのような事が起こらないよう、また当寺とその周辺地域が、往時のにぎわいを取り戻せるよう、現存する版木がその歴史を象徴する文化財として後世に保存・活用されることを望みます。

なお、世尊寺の版木の追加調査を実施するにあたり、中東洋行氏 (関西大学大学院) の協力を得ました。記して感謝します。

## 註

- (1) 石田茂作「比曾寺」『飛鳥時代寺院址の研究』大塚巧芸社 1936 年 (1977 年 第一書房より復刻)。現在はこれを「北堂丈六...」と解する見解もあります (東野治之『書の古代史』岩波書店 1994 年)。
- (2) 京都国立博物館『藤原道長』特別展覧会図録 2007 年。
- (3) 宮坂敏和『吉野 その歴史と伝承』名著出版 1990 年。
- (4) 『實隆公記』第 3 巻 太洋社 1933 年。なお、当時の鎮守の天照大神社に残された鉄釜に「比曾現光寺 明応五 (1496) 年丙辰九月八日」の銘があります (拓本のみ残存)。
- (5) 移築された塔は九輪の頂上まで八二尺四寸二分 (約 25 メートル)。基礎の計測値から、平面プランは「東塔跡」に合致します (文化庁文化財保護部建造物課「園城寺三重塔」『国宝・重要文化財 (建造物) 実測図集 その二』1999 年)。
- (6) 焼失した旧本堂の柱材は「龍門寺」から移設したものと伝えています。この柱材は本堂西側にあった旧納骨堂に一部再利用されていましたが、この納骨堂も老朽化のため 2007 年に解体されました。
- (7) 神宮司庁「比蘇寺」『古事類苑』宗教部五十四 (仏教五十四) 1912 年。廣文庫刊行会 (物集高見)「比曾寺 ひそでら」『廣文庫』第 16 冊 1918 年。竹山清文『奈良縣吉野郡 大淀村風俗誌』1918 年。望月信亨「ヒソデラ 比蘇寺」『望月仏教大辞典』第五巻 株式会社世界聖典刊行協会 1933 年があります。
- (8) 天沼俊一「比蘇寺址」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』奈良縣 1917 年 (財団法人大和文化財保存会・1978 年復刊 綜芸舎)。
- (9) 史蹟名勝天然記念物保存協会 (上田三平)「比曾寺址」『奈良縣に於ける指定史蹟 第 2 冊』史蹟調査報告第 4 刀江書院 1928 年。
- (10) 上田萬鏡『世尊寺沿革史略』聖徳太子 1305 年法要記念 1926 年。
- (11) 前掲 (1) 石田論文。
- (12) 保井芳太郎「比曾寺」『大和上代寺院志』大和史学会 1932 年 (『日本考古学文献集成』 期 4 1985 年復刻) 比曾寺と宮滝遺跡の関係についてふれた初期の論文です。
- (13) 奈良県教育委員会『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域・龍門地区』1953 年。奈良県教育委員会『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域』1954 年。奈良県教育委員会文化財保存課編「史跡比曾寺跡」『奈良県文化財図録』・記念物編 1964 年。
- (14) 福山敏男「比蘇寺 (現光寺)」『奈良朝寺院の研究』株式会社高桐書院 1948 年。堀池春峰「比蘇寺私考」『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域』1954 年 (『南都仏教史の研究下 諸寺篇』株式会社法蔵館 1982 年再録)。
- (15) 園田香融「古代仏教における山林修行とその意義 特に自然智宗をめぐる」『南都仏教』第 4 号 1957 年 (『平安仏教の研究』法蔵館 1981 年再録)。

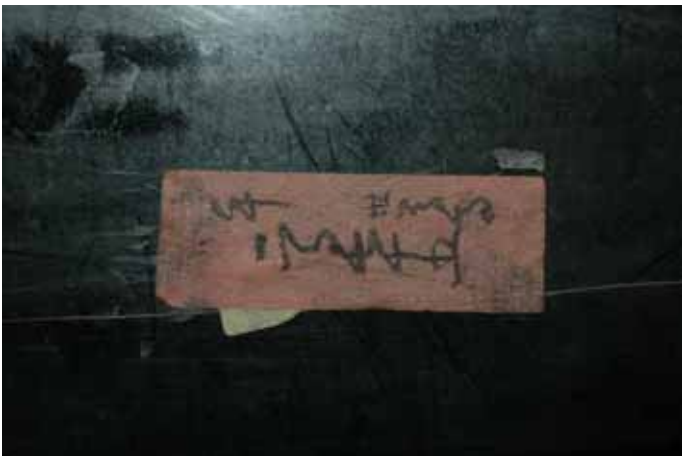
- (16) 小川光暘「吉野寺放光樟像の文化史的背景 飛鳥彫刻の用材と様式の根源に関する問題」『文化学年報』第13輯 1964年。
- (17) 大淀町史編集委員会(秋永政孝・広吉寿彦ほか)編『大淀町史』大淀町役場 1973年。このほか、現在にいたる官公庁・博物館他が作成したもので比叢寺にふれた資料として、以下のものをあげておきます。  
吉野町史編纂委員会編『吉野町史』吉野町役場 1972年。下市町史編纂委員会編『大和下市史』下市町教育委員会 1958年。下市町史編纂委員会編『大和下市史 続編』下市町教育委員会 1973年。大淀町教育委員会・大淀町ふるさと運動実行委員会『おおよど ふるさとを知らう』1979年。下中邦彦編「比叢村」「世尊寺」『奈良県の地名』日本歴史地名大系第30巻 平凡社 1981年。国史大辞典編集委員会「ひそでら 比蘇寺」『国史大辞典』第11巻 1990年。大矢良哲「世尊寺」『奈良県史』第6巻 寺院 1991年。大淀町教育委員会編『大淀町文化財図録』2005年。大淀町教育委員会編「おおよどの指定文化財」パネル展示資料 2008年。大淀町教育委員会編『大淀町の文化財』地図でみる大淀町の歴史と文化1(パンフレット) 2009年。
- (18) 竹居明男「吉野寺縁起の史料性をめぐって 欽明紀十四年五月戊辰朔祭を中心に」『日本書紀研究』第11冊 1979年(改題「吉野寺と 日本書紀」『古代日本仏教の文化史』吉川弘文館 1998年所収)。
- (19) 宮坂敏和「史跡 比蘇寺跡について」『奈良文化女子短期大学紀要』第11号 1980年(『吉野 その歴史と伝承』名著出版 1990年再録)。
- (20) 達日出典「比蘇山寺の成立」『京都精華学園研究紀要』第22輯 1984年(『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版 1991年所収)。宮家準「第二章 吉野山と修験道」『大峰修験道の研究』佼成出版社 1988年。近江昌司「謎につつまれた山岳寺院」『古代の寺を考える 年代・氏族・交流』帝塚山考古学研究所 1991年。同「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』No.426 1998年。
- (21) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『山の神と山の仏 山岳信仰の起源をさぐる』平成19年度春季特別展図録 2007年。奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『吉野川紀行 吉野・宇智をめぐる交流と信仰』平成21年度春季特別展図録 2009年。
- (22) 福塚忠司「吉野寺と文忌寸」「神叡(吉野僧都)について」私家版 2007年。
- (23) 増田早苗「『今昔物語集』と虚空蔵菩薩信仰」『思想史研究』第8号 日本思想史・思想論研究会 2008年。
- (24) 本像は平成18(2006)年3月31日付で奈良県指定文化財となりました。奈良県教育委員会『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域』1954年。井上正「奈良・世尊寺十一面観音立像」『古佛彫像のイコノロジー』1986年。奈良国立博物館『古密教 日本密教の胎動』特別展目録 2005年。奈良県教育委員会「世尊寺木造十一面観音立像」『奈良県指定文化財 平成17年度版(第47集)』2008年。
- (25) 財団法人元興寺文化財研究所『中世民衆寺院の調査研究報告書』1989年。財団法人元興寺文化財研究所(財)大和文化財保存会援助事業による「世尊寺の版木」2005年。なお世尊寺所蔵の大般若経についても既に報告があります(奈良県教育委員会『奈良県所在 近世の版本大般若経調査報告書』2005年)。
- (26) 現光寺縁起絵巻は、平成19(2008)年7月23日付で大淀町指定文化財となりました)が、鎌倉時代以降の内容をほとんど描かないことから、吉原が指摘するように、その原典となる「現光寺縁起」が室町時代に存在した可能性もあります。吉原浩人「現光寺(比蘇寺)縁起から善光寺縁起へ 霊像海彼伝来譚の受容と展開」『唱導文学研究』第五集 2007年。
- (27) 大淀町教育委員会・大淀町文化連盟「比叢学事始 国史跡・比叢寺跡の調査と研究」平成17年度大淀町文化講演会資料 2006年(比叢寺跡の研究成果を中心に行った講演・対談。講師は既に故人となった郷土史家・溝上正昭)。松田度「33比叢寺跡」『大和を掘る25』2006年度発掘調査速報展図録 2007年。大淀町教育委員会編『平成17・18年度大淀町文化財調査報告 史跡比叢寺跡・大淀桜ヶ丘遺跡』奈良県大淀町文化財調査報告第4集 2008年。坂靖・松田度「史跡比叢寺跡第5・6次調査」『奈良県遺跡調査概報 2008年』2009年。



01 収納箱



02 収納箱近撮



03 収納箱側面の貼紙



04 収納箱の把手金具



05 納められている箱と絵巻の外観



06 蓋を取った状態



07 卷子現状



08 軸先側面



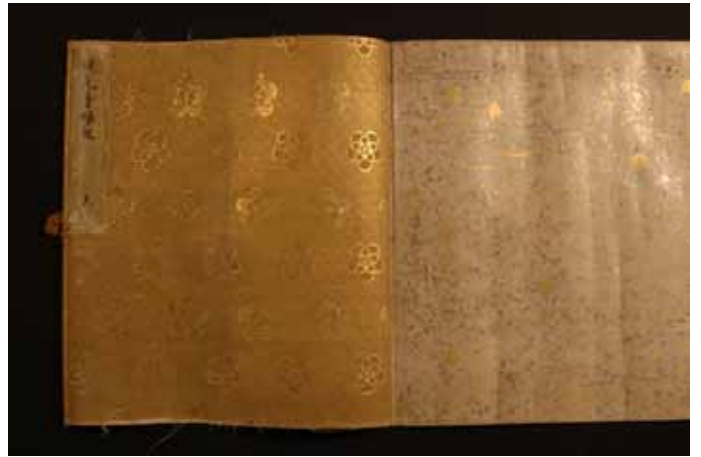
09 軸先頂部1



10 軸先頂部2



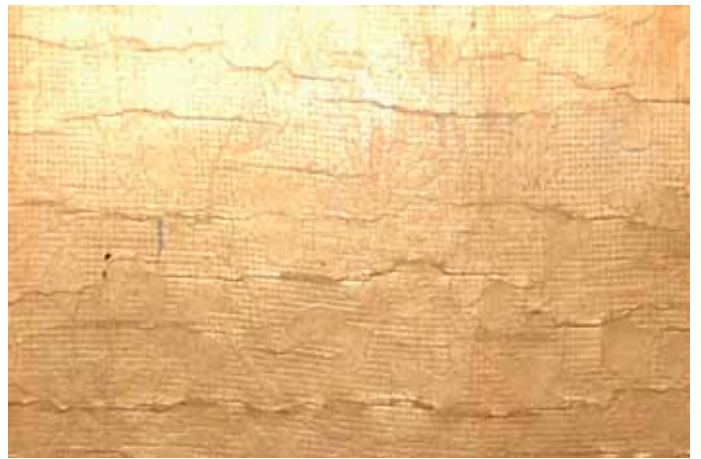
11 外題紙と手ずれの状況



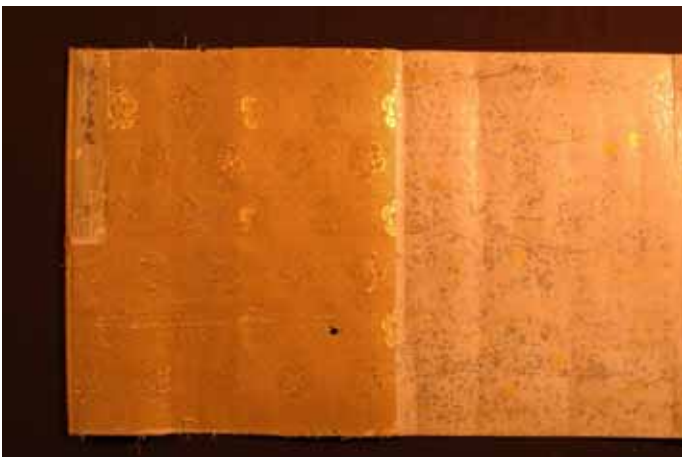
12 上巻表紙(表)



13 上巻表紙(裏)



14 上巻表紙(裏)詳細

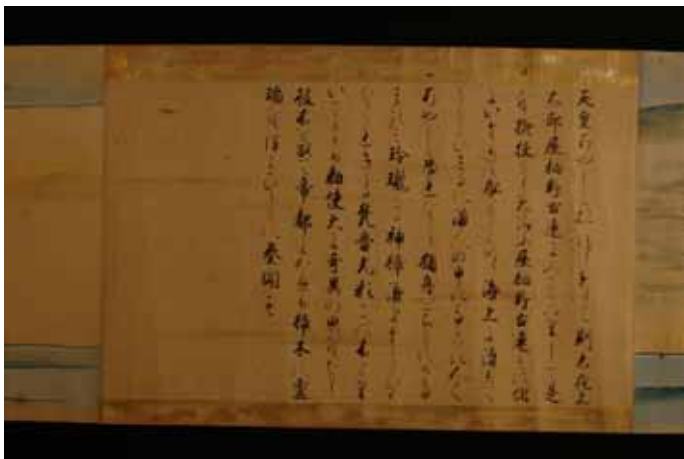


15 下巻表紙(表)

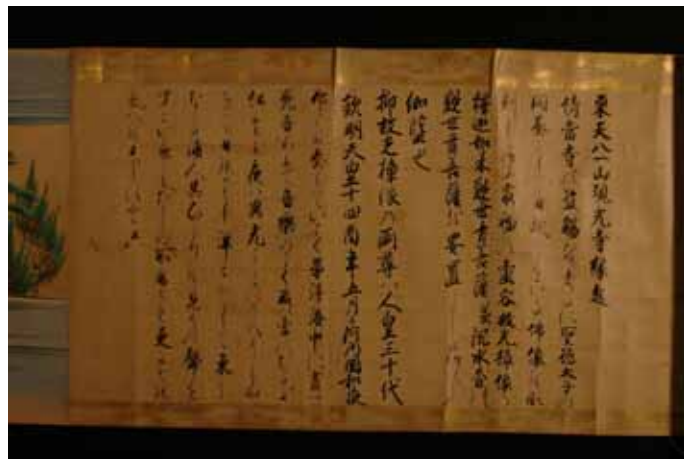


16 下巻表紙(裏)

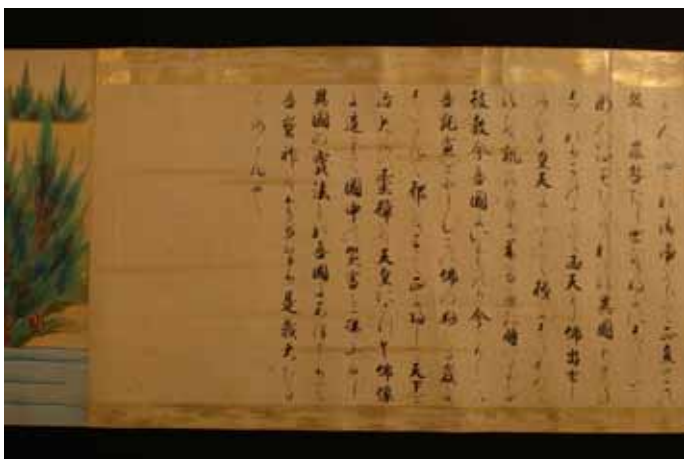




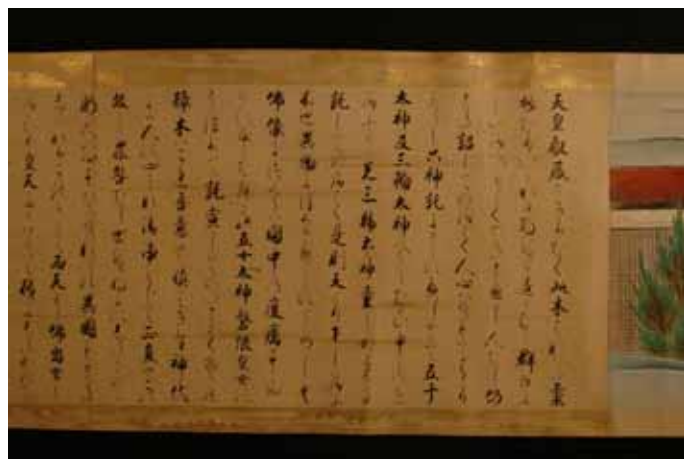
17 上卷詞第二段



18 上卷詞第一段



19 上卷詞第三段左



20 上卷詞第三段右



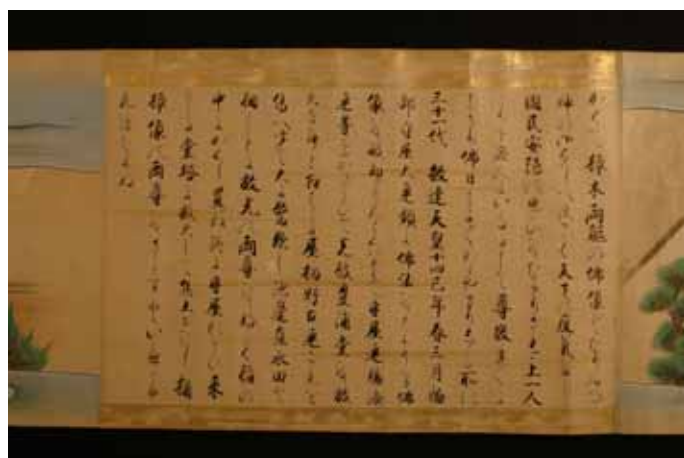
21 上卷詞第四段左



22 上卷詞第四段右



23 上卷詞第六段



24 上卷詞第五段



25 上巻絵第一段左



26 上巻絵第一段右



27 上巻絵第二段左



28 上巻絵第二段右



29 上巻絵第四段



30 上巻絵第三段



31 上巻絵第五段左



32 上巻絵第五段右



33 上卷奥紙



34 上卷繪第六段



35 下卷詞第二段



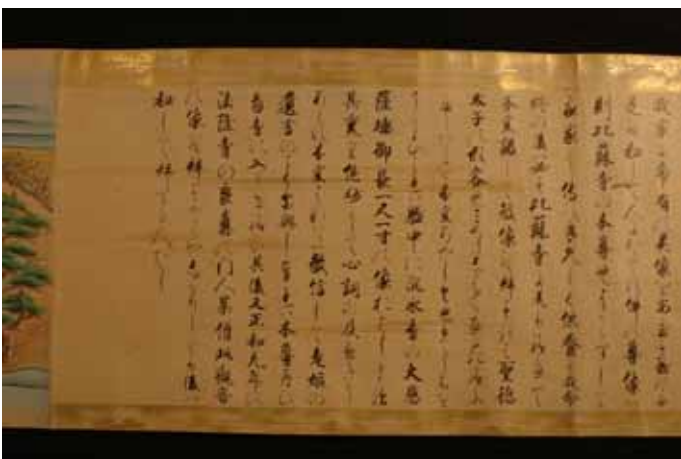
36 下卷詞第一段



37 下卷詞第三段左



38 下卷詞第三段右



39 下卷詞第四段左



40 下卷詞第四段右



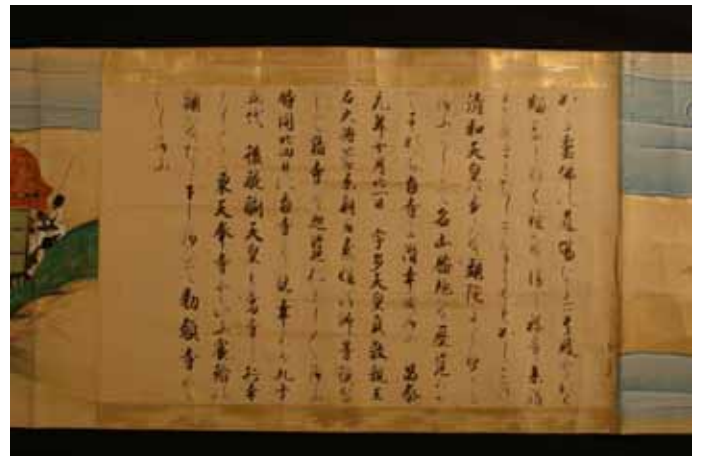
41 下卷詞第五段左



42 下卷詞第五段右



43 下卷詞第七段·奥紙



44 下卷詞第六段



45 下卷繪第一段



46 下卷繪第二段



47 下卷繪第三段



48 下卷繪第四段



49 下巻絵第五段左



50 下巻絵第五段右



51 下巻絵第六段右後



52 下巻絵第六段右前



53 下巻絵第六段左後



54 下巻絵第六段左前



55 下巻絵第六段詳細(吉野川の筏流し)



56 下巻絵第六段詳細(柳の渡しか)



57 No.1(表)



58 No.2(表)



59 No.2(裏)



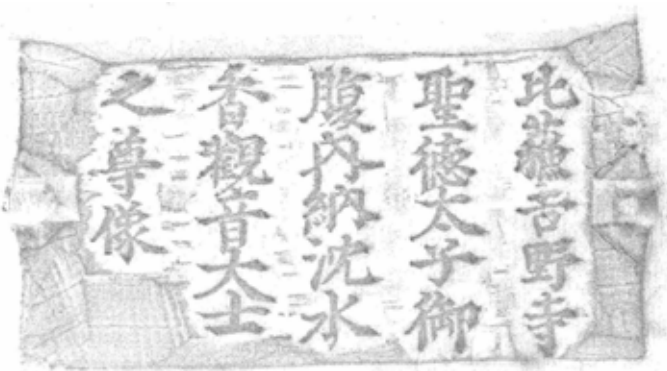
60 No.8(表)



61 No.25(裏)



62 No.37(裏)



63 No.49(拓本・表)



64 No.50(拓本・表)



65 No.50(拓本·裏)



66 No.51(拓本·表)



67 No.51(裏)



68 No.52(拓本·表裏)



69 No.54(拓本·表裏)



70 No.55(拓本·表裏)



71 No.56(拓本·表)



72 No.57(拓本·表)

## 2 佐名伝遺跡（平成21年度の調査）

### 調査にいたる経緯

大淀町文化財保護審議会の中村隆昭委員から、佐名伝地内の国道沿いで工事が始まるとの連絡が町教育委員会に入ったのは、平成21（2009）年3月19日のことでした。場所は、国道370号線に面した佐名伝789-1番地で、地籍図上は標高約136.5mの畑（現在は荒地）となっている箇所です。

この地点を『奈良県遺跡地図』で確認すると、紀ノ川（吉野川）北岸に位置する佐名伝遺跡（奈良県遺跡地図番号 20-A-5）の範囲の南西端にあたり、遺跡の中心と目される河岸段丘面（現在の貯木場付近）の南斜面地と、段丘の南側を東西に走る国道370号線に挟まれた敷地となっています（図1・上）。

昭和52（1977）年から同53（1978）年にかけて実施された国道370号線の新設工事の際に、この地点の東隣で多量の土器・石器がみつき、急報に駆けつけた五條市の郷土史家・堤昭二（つつみしょうじ）がこれを採集しました。これらは現在、市立五條文化博物館の「堤昭二氏収集考古資料」として保管され、当時の状況の詳細な聞き取り調査の成果と出土遺物の実測図が公表されています<sup>(1)</sup>。この時の出土遺物には、縄文晩期前半（滋賀里・a式期）の深鉢・浅鉢、弥生土器、埴輪、鎌倉時代の土師器、瓦があります。佐名伝遺跡ではこれ以外にも、石斧等の採集資料（南部2004）が知られ、遺跡の範囲内にある畑地でも7世紀初めごろの須恵器、中世の土師器片等が採集できるため、縄文時代から鎌倉時代にいたる複合遺跡であることが判明しています。

平成12（2000）年と平成16（2004）年には、段丘上の佐名伝集落地内で個人住宅の建設に伴う試掘調査が実施されており、縄文中期末の土器片（第1次調査）、古墳時代後期の竈付竪穴住居、各種遺物とそれに続く飛鳥時代の建物跡（第3次調査）などがみつかっています<sup>(2)</sup>。また、紀ノ川の河川改修に伴い、平成18（2006）年から平成23（2011）年まで、国道370号線の南側で遺跡確認のための試掘調査が実施され、川面に面した石垣、縄文・弥生土器片、近世土器・陶磁器、銭貨（寛永通宝）や瓦が、河川堆積層下からみつかっています（第4次～8次調査）<sup>(3)</sup>。本書で報告する調査を含めると、当遺跡では通算で9次の調査が行われた事になります。

### 【計画とその後の進捗】

移転が計画されている農園直売所はプレハブ仕様だったことから、建物にかかる基礎工事はおこなわず、敷地の整地（砂利敷き等）後、約1mの段差がある近隣畑地との境界による壁を施工し、排水・トイレ等の最小限の工事を行う計画でした。

これに伴い町教育委員会は、当遺跡の範囲確認を兼ねて、所有者と協議のうえ、簡単な工事立会調査を実施することにしました。そして、平成21（2009）年8月13日付けで埋蔵文化財発掘の届出を奈良県教育委員会に提出後、同年9月25日付けで工事立会調査を実施するようとの通知が同教育委員会からありました。

これを受けて、10月1日から11月30日の期間中、工事にとまない断続的に立会調査を実施した結果、中世以前の洪水層下から縄文晩期前半を中心とした土器などがまとまってみつかったため、出土状況の記録と出土遺物のとりあげを行いました。

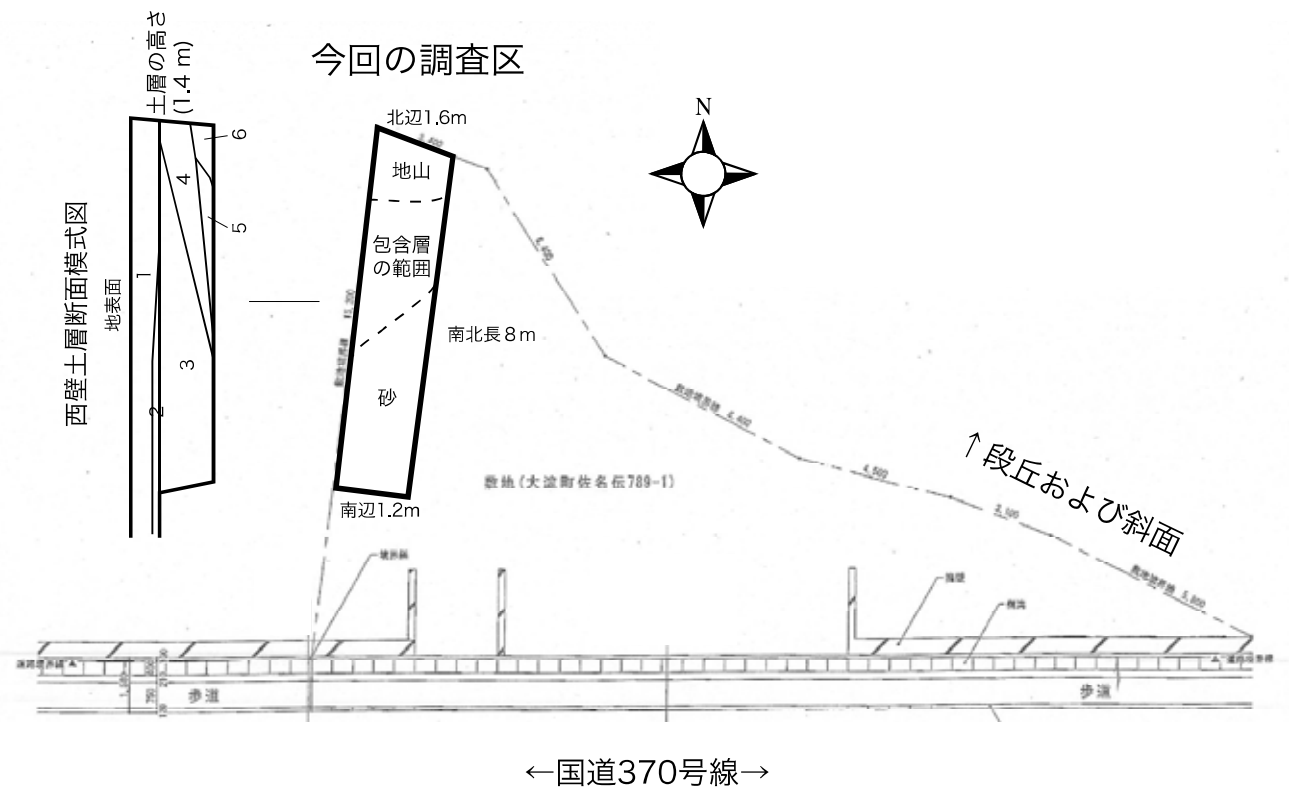
ただし遺構は確認できなかったため、調査後は特に遺跡保存等の措置をとらず、建物の竣工まで定期的に工事の進捗状況を見届けることにしました。なお、この工事は同年12月に完了し、現在に至っています。



図 1



佐名伝遺跡 平成21年度調査地の位置図



佐名伝遺跡 平成21年度調査区の平面・断面模式図

## 調査の成果

### ア 調査の方法

調査にあたり、よう壁工事予定地である敷地の西端部に、南北方向の調査区（図1・下）を設定しました。調査区の面積は南北8m、東西1.2～1.6m、面積11.2㎡です。

調査区南辺から南側の国道370号線までの距離は7.8mを測ります。国道370号線の南側は、紀ノ川（吉野川）にむかって落ち込む谷地形となり、現国道面から河床面からの比高差は約11mあります。

調査区西側は畑地です。ただし、地層が露出する0.7～0.8mの段差となっていて、この段差を境に調査区側が低くなっています。北辺は河岸段丘面から約2m下がる急斜面となっています。

上記の調査区西辺の段差を事前に精査したところ、縄文土器を含む包含層の露出が確認できました（PLATE 11-9・12）。そこで、これを調査区西壁とし、地山が確認できる深さまで重機で掘り下げたところ、現地表より0.5～0.6m下で地山が確認できました。また、上記の縄文土器の包含層は、水平堆積ではなく、南側に向かって傾斜していることもわかりました。

### イ 基本層序

基本層序は調査区西壁（高さ1.4m）で観察しました。上から順に次のとおりです。

層：耕土層（暗灰色砂質土）約0.3m（図1断面模式図1）

層：整地層（茶褐色砂質土でバラスを含む）0.1～0.3m（同上2）

層：洪水堆積層（黄灰色砂質土）（同上3）

層：遺物包含層（黄灰色シルト・炭混じり）（同上4）

層：粘土層（黄灰色粘土）（同上5）

地山（砂礫層）（同上6）

～層は水平堆積で、遺物をほとんど含まない耕作土です。

層は遺物や小石等を含まない砂の堆積層です。河川との関係から洪水堆積層と判断しました。

層以下は南側（川側）に向かって下がる斜め堆積となっており、後述のように北に向かって地山が高くなるのも、現在の段丘斜面にも名残として残る、原地形の反映といえます。

層は、層と地山に挟まれるかたちで検出しましたが、土器底部（PLATE 12-14）などの縄文時代の遺物が多く含まれており、その破片の多くが南側に傾いた状態で埋没し、北側の段丘上から流れ込んできた様子を示していました。したがって層は、段丘上から崩落してきた二次的な遺物包含層と判断しました。

地山を一部覆う層も斜め堆積で、遺物は含まれていませんでした。なお、各層ともに細分はできず、これらに伴う遺構は検出できませんでした。

### ウ 出土遺物

出土遺物には縄文土器・石器と石製遺物（サヌカイト剥片）、その他の土器・陶磁器があります。大半は工事中の排土から採取しましたが、縄文時代の遺物は層中からの出土とみられます。

#### 【縄文土器】（PLATE11 15・16，PLATE12 17～22）

コンテナに換算して1箱分あります。そのほとんどが胎土に金雲母を含む、無文か条痕をもつ深鉢の胴部片で、一部に精良な胎土の黒色磨研土器が含まれています。口縁部を中心に観察する

と、有文の個体については複数の並行沈線を口縁部付近に施す縄文晩期前半の資料（PLATE 12 18～22）がみられます（連続する刻み目を施す個体：PLATE 12 21もあります）。

特徴的なものとしては、水銀朱やベンガラ（第2酸化鉄）の付着した資料6点（34頁の表3、35・36頁のNo.1～No.6）があります。とくに、土器の内面に水銀朱が付着する個体がほとんどで、当時の水銀朱の利用方法について考えるうえでも重要な資料といえます（水銀朱、ベンガラ付着土器の分析結果については、31ページの付 奥山報告をご参照下さい）。

#### 【石製遺物（石器・剥片）】（PLATE 12 23・24）

ほとんどはサヌカイト（二上山産の石英安山岩）の剥片ですが、長さ5～8cm、厚みが最大1cmほどの剥片が12点あります。風化した「皮」がそのまま残っている個体もあり、製品に仕上げるまでの比較的大きな剥片を遺跡に持ち込み、加工する作業が当遺跡内で行われていた可能性を示唆します。なお、チャート（堆積岩の一種）の剥片が1点、サヌカイトと断定できない安山岩の剥片が数点あります。また、砂岩の円礫から剥離した剥片を素材とし、縁辺部を剥離して刃部を作り出す「粗製剥片石器」が1点あります（23）。このような石器は、すでに五條市・上島野遺跡の出土資料等で知られていましたが、佐名伝遺跡で確認されたのは本資料が初めてです<sup>(2)</sup>。

なお、表面が赤色化した砂岩製の石製遺物も出土しています（24）。野外炉等に用いられた石材の一部である可能性が考えられます。

#### 【その他の遺物】

弥生土器の可能性のある土器片が3点、古墳時代とみられる土師器甕片が1点、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器片が4点、中世の土師器皿片が2点、近世の磁器片が2点あります。しかし、いずれも層の包含層にともなわない、層の耕作土中に混在していた遺物と考えられます。

### まとめ

#### 【遺跡の範囲と洪水堆積】

今回の調査では、佐名伝遺跡の隣接地（河岸段丘の縁辺部）の様相が明らかとなりました。出土遺物は、縄文時代の遺物包含層も含め、河岸段丘上からの流れ込みか、遺構に伴わないものと判断しました。本報告の調査区は遺跡の南西端にあたるため、佐名伝遺跡の範囲は本報告の調査区より北東側に位置づけられます。これは従来の遺跡の想定範囲を裏付ける結果でもあります。

遺物包含層の上部には、分厚い洪水層が堆積していました。この洪水による堆積層は、今回の調査で一部が確認できたのみで、洪水の規模等については不明です。ただし、この洪水によって、従来もっと厚かったと考えられる縄文時代の遺物包含層も、すでに削平されている可能性が考えられます。

なお、国道南側で行われた平成18（2006）年10月の当遺跡第6次調査では、分厚い河川堆積層の上に、中世土器を含む遺構が確認されていますので、今回検出した洪水層も同様に、中世以前の洪水によるものと想定されます。

#### 【包含層と遺跡の構造】

確認された縄文時代の遺物包含層は、集落の中心部で想定されるような単純な水平堆積ではなく、斜面から流れ込んだ二次的な堆積でした。ただし、約11㎡の調査区としては、遺物の包含量も少なくありません。このことから、当地点は、集落中心部から川側へと廃棄された土器・石器の集積地（いわゆるゴミ捨て場）となっていた可能性が想定されます。この遺跡の集落構造の解明は、今後の河岸段丘上の集落本体の調査成果をまって検討すべき課題といえます。

## 【出土遺物】

縄文土器については、概ね縄文晩期前半代の資料群と考えられます。そのほとんどは、1977・78年に採取された器種や型式を大きく逸脱するものではありませんが、水銀朱が付着した土器、また、炭化物の付着する土器などについては、今後も科学的分析の結果次第で新知見が得られると期待されます。

石鏃、削器等、明確に石器と認定できる生活道具の出土は少ないですが、サヌカイトの比較的大きな剥片などは、この遺跡内での石器製作を想定させます。また、漁具（石錘等）や石斧の出土も十分予想されるものの、現在のところ多くは知られていません。本報告の調査でも、漁具や石斧等の遺物を見つけることはできませんでした。

## 【今後の課題】

佐名伝遺跡は、偶発的、単発的な調査でその様相が少しずつ明らかになってきている遺跡です。

継続的に行われている河川敷周辺の試掘調査や本報告の調査結果から、国道370号線よりも南側の河川敷については、厚い洪水堆積層の広がりが予想されます。また、遺跡の中心とみられる段丘上は平坦な貯木場となっていることから、遺跡の包含層の大半は、すでに削平されている可能性もあります。ただし、本報告の事例のように、遺跡縁辺部の斜面地付近には、二次的に堆積した遺物が多く包含されている可能性があり、地道な範囲確認調査を続けることで、遺跡の範囲と様相が徐々に明らかになってゆくと期待されます。

なお、今回の調査成果についてはすでに公開されていますが<sup>(4)</sup>、本報告をもって正式な見解とさせていただきます。また、出土遺物の実測図等については、今後機会をあたためて掲載し、科学的な分析の検討もふまえて詳しい報告を行う予定です。

この調査にあたり、土地所有者で今回の調査にご理解を賜りました故中西政治氏をはじめ、地元佐名伝在住の町文化財保護審議会委員・中村隆昭氏、調査にご支援とご協力をいただきました島田組、町文化連盟文化財調査会の皆様に記して感謝申し上げます。

## 註

- (1) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『吉野・紀ノ川悠久の流れ 古代大和と紀伊の文化交流』春季特別展図録 第41冊 1993年。奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『吉野川紀行 吉野・宇智をめぐる交流と信仰』春季特別展図録 第71冊 2009年。
- (2) 近藤奈央「 . 収集・保管資料（五條市以外の遺跡・採集地不明の遺物） 1 . 隣接地域の遺跡の収集・保管遺物〔1〕大淀町・佐名伝遺跡」『市立五條文化博物館 資料目録 堤昭二氏収集考古資料を中心に』2004年。
- (3) 佐名伝遺跡については、奈良県立橿原考古学研究所により以下の調査報告が刊行されています。佐々木好直「吉野郡大淀町佐名伝遺跡第1次調査報告」『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1999年度』奈良県立橿原考古学研究所 2000年。南部裕樹ほか「佐名伝遺跡2003年 附編 佐名伝公民館所蔵遺物の紹介」『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）2003年』奈良県立橿原考古学研究所 2004年。佐々木好直「佐名伝遺跡隣接地試掘調査」『奈良県遺跡調査概報2006年（第2分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 2007年。米川仁一「佐名伝遺跡隣接地試掘調査」『奈良県遺跡調査概報2007年（第2分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 2008年。小林千夏「佐名伝遺跡隣接地試掘調査」『奈良県遺跡調査概報2008年（第3分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 2009年。佐藤麻子「佐名伝遺跡隣接地」『奈良県遺跡調査概報2009年（第3分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 2010年。
- (4) 松田 度「洪水に埋もれた縄文人の記憶 佐名伝遺跡」『大和を掘る28』2009年度発掘調査速報展図録 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2010年。



01 調査区北側の段丘面(東から)



02 調査地北側の段丘上面(西から)



03 今回の調査区東側(1977・78年の土器出土地点付近)



04 工事・調査前



05 敷地西壁の精査状況(東から)



06 調査区(よう壁予定地)掘削前(北西から)



07 調査区掘削中



08 調査区全景(北から)



09 調査区西壁(地山検出後)



10 調査区北壁(地山検出後)



11 調査区近景(西壁から北壁にかけて)



12 調査区西壁(精査後)



13 遺物出土状況(西壁)



14 遺物出土状況1(土器底部)



15 出土遺物1(土器底部)



16 出土遺物2(条痕のある破片)



17 出土遺物3(土器口縁部・無文その2)



18 出土遺物4(土器口縁部・有文)



19 出土遺物5(土器・有文)



20 出土遺物6(調査前の工事中に採集された土器)



21 出土遺物7(土器口縁部ほか・有文)



22 出土遺物7(口縁部に赤色顔料の付着した土器 No.8)



23 出土遺物8(粗製剥片石器)



24 出土遺物9(赤色化した石材片)

## 付 大淀町佐名伝遺跡出土土器片の顔料分析について～簡易的な蛍光X線分析による判定～

### はじめに

蛍光X線分析法は非破壊・非接触で元素分析が可能であることから、文化財の材質調査に広く利用されている。物質は原子によって構成されており、その原子は、原子核と電子から成る。原子核は陽子・中性子から成り、電子は原子核の周囲を周回している。物質にX線を照射すると、X線のエネルギーによって電子が軌道外へ弾き飛ばされる。その結果、電子の空席（空孔）が生じ、そこへ新たな電子が他の軌道から移動し充填される。この移動・充填のときに、エネルギー差を生じ、その差を二次X線（蛍光X線）として放出する。この二次X線は「蛍光X線」と呼ばれ、蛍光X線のエネルギーは原子に固有なものであるため、試料を分析して得られる蛍光X線のエネルギーを分析・解析することで原子を特定することができる。

本件の目的は、佐名伝遺跡出土土器片に付着した赤色顔料と思われる物質の材料を特定することである。土器に利用される赤色顔料には、酸化鉄由来のベンガラ（主に $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）のほか、水銀(Hg)と硫黄(S)の化合物である硫化水銀( $\text{HgS}$ )からなる水銀朱（単に朱とも呼ぶ）がある。本件では蛍光X線分析による鉄(Fe)及び水銀(Hg)の検出結果を総合的に判断し、顔料の特定を試みた。蛍光X線分析には奈良県立橿原考古学研究所設置のSPECTRO MIDEXを使用した。その測定条件は次の通り。測定条件：大気雰囲気、管電圧-45kV、管電流-0.25mA、測定時間 180 秒

### 結果

分析のため提供された資料は8点であるが、分析機器の特性上、凹凸の著しい資料の測定は困難である。したがって、分析が行えたのは8点中6点であった。測定は資料中の赤色付着物の顕著な部分を選んで実施した。結果は以下の表3の通りである。

資料番号	Fe	Hg	備考
No.1			顔料は水銀朱（内面に顕著に付着）
No.2			顔料は水銀朱（内面に顕著に付着）
No.3			顔料は水銀朱（内面に顕著に付着。外面に一部付着）
No.4			顔料はベンガラ（外面に顕著に付着）
No.5			顔料はベンガラ（内面に顕著に付着）
No.6			顔料は水銀朱（土器底部。内面に顕著に付着）
No.7			凹凸著しく分析不可
No.8			凹凸著しく分析不可（但し、外面に一部顔料が付着）

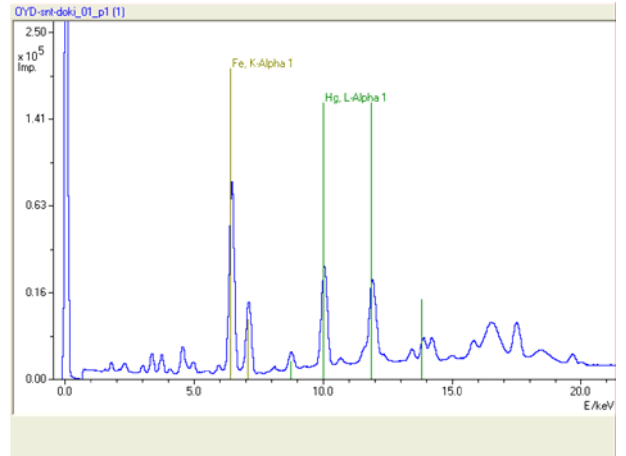
：顕著に検出、                   ：検出、                   ：測定不可

以上より、土器片の赤色顔料は、No.1～3およびNo.6は水銀朱を用い、No.4～5はベンガラを用いていたものと考えられる。しかしながら、水銀朱の利用については縄文時代後期関東地方の土器型式である賀曽利B型式の土器において、水銀朱とベンガラの混合利用も報告されている（成瀬正和「薄磯貝塚出土の赤色顔料関係遺物」『いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊 薄磯貝塚』1988年）。そのため、本件の分析結果が必ずしも朱のみの単独利用を示す結果であるとは限らないことを予めお断りしておく。なお、本件は概略的な調査と位置付け、本資料が水銀朱単独かベンガラとの混合利用であるかについては、今後、高倍率顕微鏡などによる詳細な観察などの調査に期待したい。（奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義）





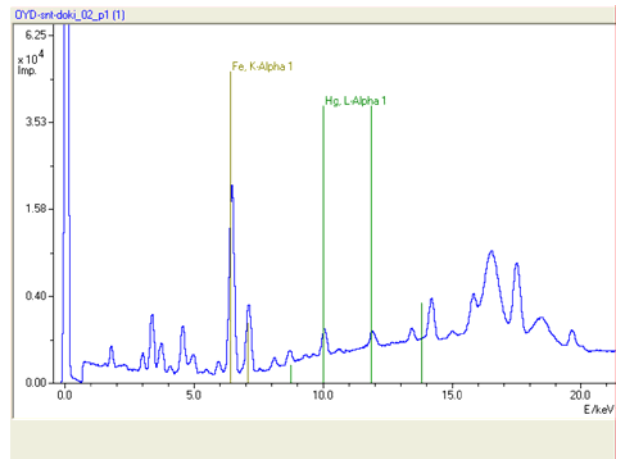
25 土器No.1表



26 土器No.1 蛍光X線スペクトル



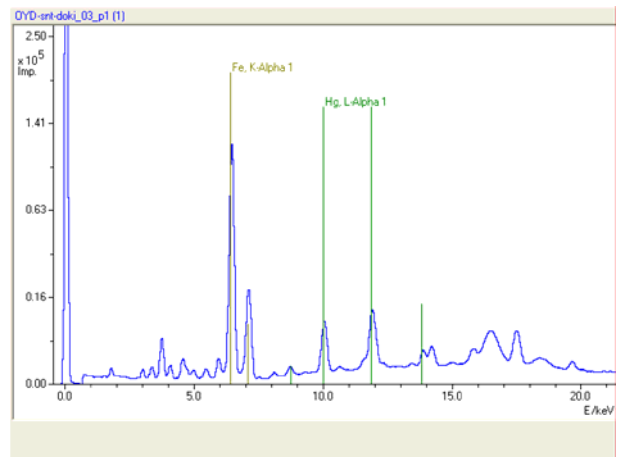
27 土器 2表



28 土器No.2 蛍光X線スペクトル



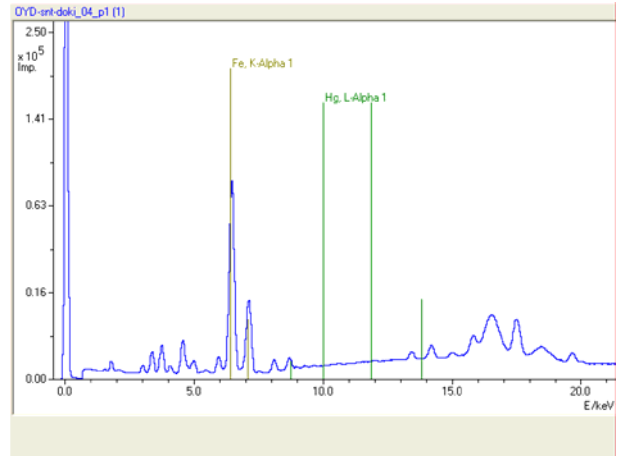
29 土器 3表



30 土器No.3 蛍光X線スペクトル



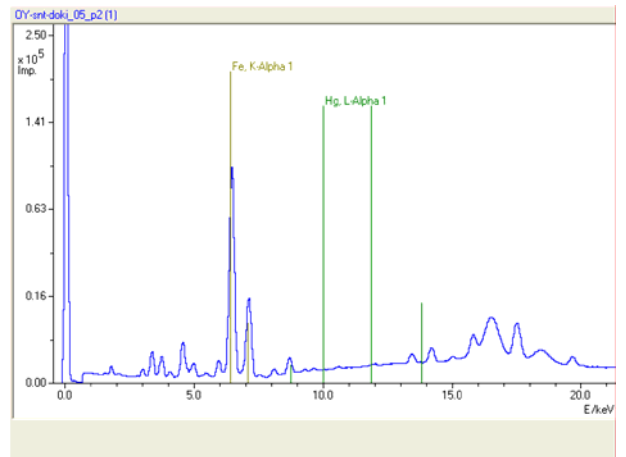
31 土器 4表



32 土器No.4 蛍光X線スペクトル



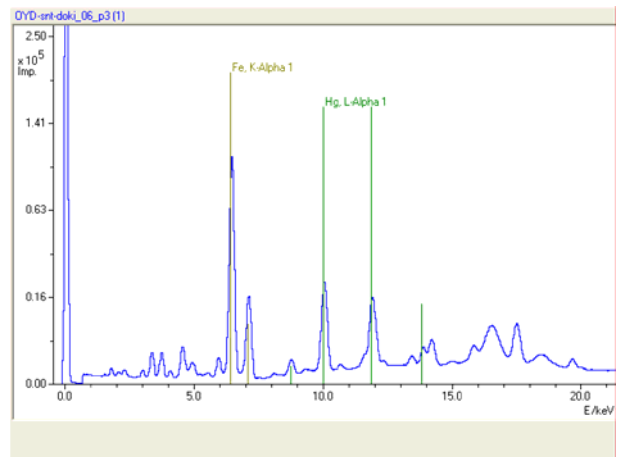
33 土器 5表



34 土器No.5 蛍光X線スペクトル



35 土器 6表



36 土器No.6 蛍光X線スペクトル

### 3 槇ヶ峯古墳（平成21年度の調査）

#### 調査にいたる経緯

槇ヶ峯古墳（槇ヶ峯1号墳：奈良県遺跡地図番号20-A-35）は、大淀町新野に所在する槇ヶ峯古墳群のひとつです。その存在が知られるようになってからのち、奈良県立橿原考古学研究所による簡易測量調査が、昭和52（1977）年2月6日から10日間の期間で行われていますが、発掘調査は実施されていません。

槇ヶ峯古墳は小規模な石室を有し、玄室（奥の部屋）内に石柵とよばれる施設をそなえ、玄室前道部（玄室と羨道に挟まれた玄関状の空間）を有する可能性が指摘されています。これらは、現在の紀ノ川下流域（和歌山市内）に集中して分布する「岩橋（いわせ）型石室」の特徴とされます。奈良県内では、平群町・三里古墳（県指定史跡）、下市町・岡峯古墳（県指定史跡）とともに、特異な構造を観察できる数少ない好例です。なお、新野区の共同墓地入口の六地藏の裏側には、小規模な円墳とみられる槇ヶ峯5号墳が残されています。

槇ヶ峯古墳の玄室は、昭和52年の測量成果によると幅約1.7m、長さ1.65m以上（推定2.8m）、羨道部（石室へいたる通路部分）は一部削平されていますが推定で3.7m以上。玄室前道部の有無は確認できません。

この槇ヶ峯古墳については、見学者への便宜を図るため、平成18（2006）年から継続的な草刈り等を町文化連盟文化財調査会の有志で実施し、平成19（2007）年1月17日には町指定の文化財（史跡）となり今にいたっています。

また、これと並行して、史跡公園としての簡易整備を目指し、現況図の作成（墳丘の測量調査）の実施を検討してきました。そこでまず、平成21（2009）年度事業として、専門業者に本古墳の航空測量調査を委託し、積雪の残る平成22（2010）年1月、測量のための基準点測量と墳丘本体の測量調査をあわせて実施しました（以下の報告は、大淀町教育委員会・株式会社南紀航測センター「大淀町・槇ヶ峯古墳測量調査 基準点測量成果簿」平成22年1月を参考にしています）。

#### 調査の成果

##### ア 現状と調査の方法

この古墳は現在、墳丘各所が開墾による削平を受けていますが、昭和52年の測量の結果、墳丘径約11mの円墳と推定されていました。

墳丘の高さは推定で約2.5m。周溝等の有無は確認されておらず、墳丘周辺には葺石とみられる川原石が多く散在しています。石室内は一定程度土砂で埋没していますが、天井石が数箇所抜き取られているほかは良好に遺存しています。

また、古墳を含む周囲455㎡は、平成18（2008）年8月8日に町有地となっており、当地に



CUT 7 槇ヶ峯古墳 近景（南西より）



CUT 8 槇ヶ峯古墳 測量風景（東より）

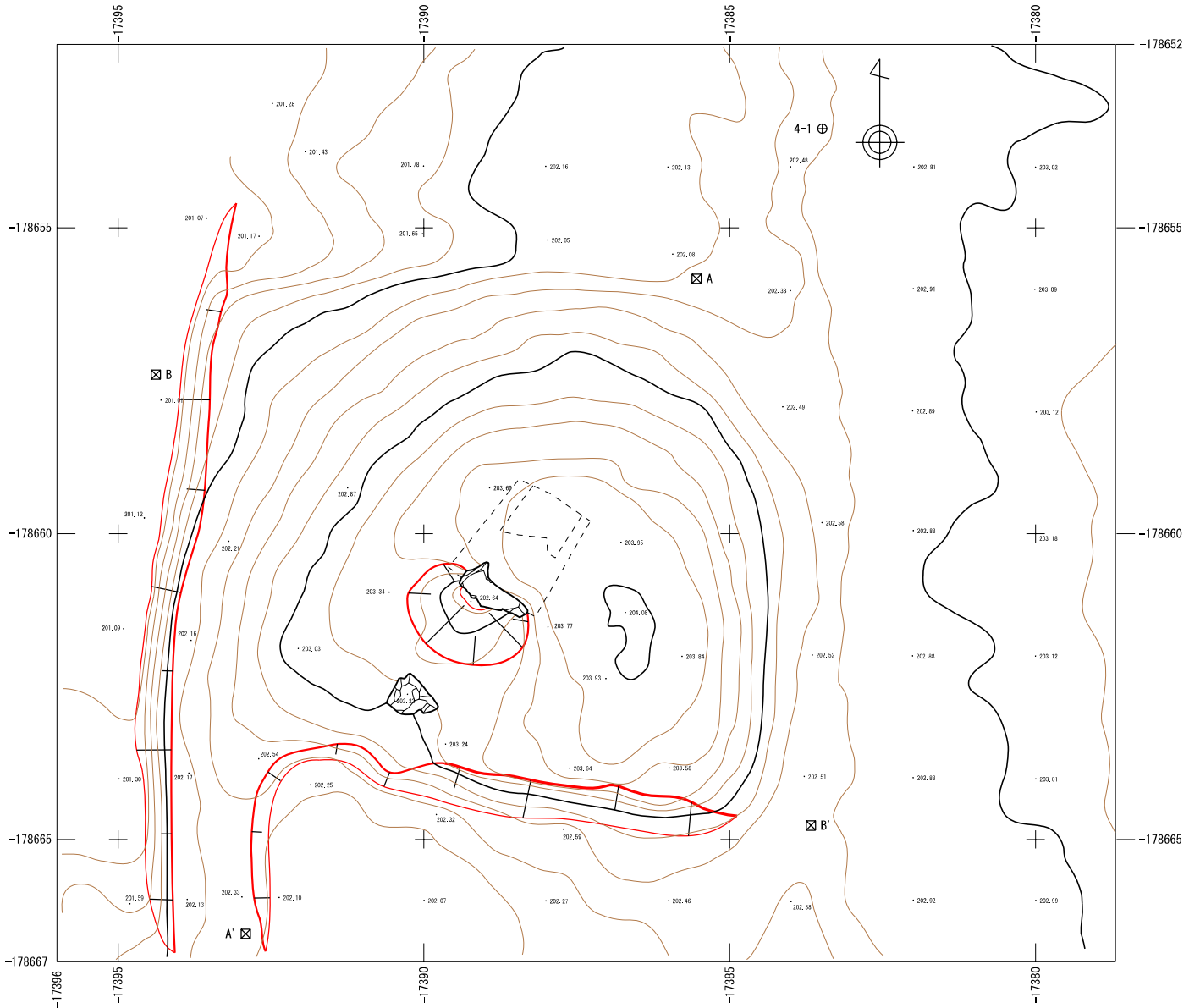


01 吉野川を望む(中央手前下が横ヶ峯古墳)



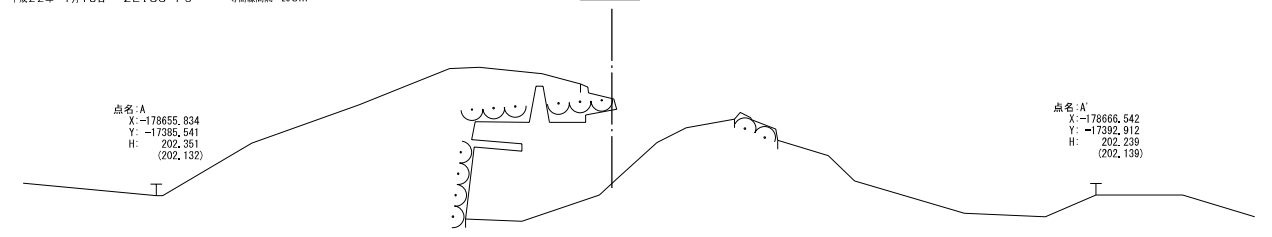
02 横ヶ峯古墳を上空からみる

図 2



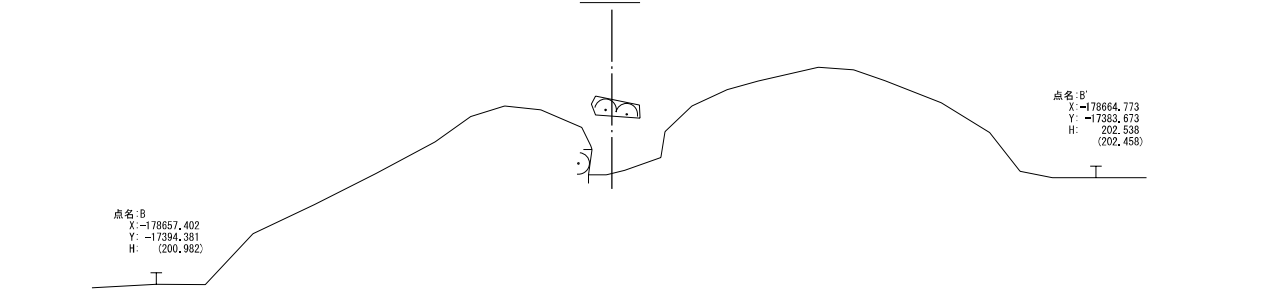
撮影 平成22年 1月15日 ハッセルブラッドMKW 座標系 東京  
 図北 平成22年 1月18日 ZEISS P3 等高線間隔 20cm

A-A' 榎ヶ峯古墳 平成21年度測量調査平面図 (1/100)



DL=200.00

B-B'



榎ヶ峯古墳 平成21年度測量調査断面図 (1/100)

DL=200.00

林立していたスギの植林木についても同年に伐採を行ったため、周囲の視界は大変良好です。

今回は、このような条件を考慮し、正確なデータを取得する事を目的に、GPSとトータルステーション等により測量の基準点、評定点を確保したうえで、無人ヘリコプターによる航空測量を実施し、墳丘の現状での削平度や、墳丘と石室の位置関係などを計測・記録することにしました。

## イ 調査の成果

古墳の位置する標高は、墳丘基底面で海拔 202.5m 前後、墳丘の南側と西側は、開墾のため大きく削平されています。これに対し、北側と東側の墳丘基底ラインはほぼ旧状をたもっている事がわかります。この旧状の基底ラインを基に、玄室部中心を軸に正円形で復原した墳丘の直径は 11m となり、ほぼ従来の推定を裏付ける結果となりました。

墳丘の高さは、現状で約 1.8~2.0m を測りますが、石室天井石が露出するなど、かなりの削平をうけているようです。そこで、計測を行った断面図(図4・下)

から、残りのよい東側墳丘斜面の傾斜角を基に本来の墳丘カーブを算出したところ、本来の高さは 2.5m 以上であったと推定されます。

南西方向に開口する石室は、測量の結果、最大全長 7.5m の範囲内に収まることがわかりました。玄室(埋葬部分)は幅 1.4m~1.7m、長さ 2.2m 以上、羨道部(玄室前道部を含む)の長さは 3.3m 以上となります。石室の高さは現状で 1.3m を測りますが、本来の高さは、埋没している土砂を除くと約 1.6m と推定されます。

参考までに、吉野郡内の古墳の測量値と比較すると表 4(45・46 頁)のようになります。発掘調査が行われ、その規模が判明した岡峯古墳(下市町)や越部 1・2 号墳(本町越部)に比べると、槇ヶ峯古墳は墳丘、石室規模ともに小型の横穴式石室墳といえます。

## まとめ

本報告の測量調査によって墳丘の規模はほぼ明らかとなりましたが、玄室内の構造調査については、今後の課題として残されています。

今後は、この測量成果をふまえて墳丘および石室部分の試掘調査等を実施し、上記の推定が正しいのかどうか、年代の決定に必要な土器等が石室内に残っているかどうか、また、「岩橋型石室」としての特徴をどの程度有しているのかを明らかにすることも、今後の調査の課題です。

将来的には、「古墳公園」としての史跡の活用と、パンフレット等での紹介を通じて、本町を代表する古墳(文化財)としての周知を図ってゆく予定です。



CUT 9 槇ヶ峯古墳 墳丘測量時の様子(南西)



CUT 10 槇ヶ峯古墳 石室近景(南より)



CUT 11 槇ヶ峯古墳 石室内の石棚

## 付 吉野郡内の横穴式石室墳（平成 22 年度の調査）

大淀町は、吉野郡内でもっとも古墳が多く作られた場所です。例えば、奈良県の遺跡地図で探すと、吉野郡内で合計 66 基。その内訳は、大淀町 52 基、吉野町 6 基、下市町 6 基、川上村 2 基となります（平成 23 年 3 月現在）。しかし、一部の古墳を除いて詳細な調査はなされておらず、その大半の古墳の規模や年代は明らかにされていないのが現状です。

本書で報告を行った槇ヶ峯古墳の比較検討資料として、吉野郡内にある古墳のうち、今でも見学できる主要な石室について、平成 22 年 10 月から 23 年 1 月にかけて簡易計測を行いました（表 4）。以下その成果を記します。

### 【石神古墳（大淀町指定文化財）と大岩古墳群】

大岩地区では、昭和 60 年（1985 年）から翌年にかけて、ゴルフ場の造成にともなう発掘調査が、奈良県立橿原考古学研究所によって行われました。

その結果、6 世紀後半頃、盆地の北西端に大岩 4 号墳という横穴式石室の古墳が築造され、続いて 7 世紀に石神古墳（大岩 1 号墳）と、4 号墳の近くに 5 号墳が築造されたことが分かりました。また、古代から室町時代にかけて、埋葬などに古墳の石室を再利用した痕跡もみ分かりました。



CUT 12 石神古墳（南より）

石神古墳は大岩区の北端、標高約 280m の丘陵の頂部に築かれた、直径 22.5m、高さ約 4.3m の円墳です。花崗岩の自然石を積みあげた全長約 10m の横穴式石室が、南にむかって開いています。石室は、奥の部屋（玄室）が長さ 4.2m、幅・高さは共に 2m、手前の通路部分（羨道）が長さ 5.8m、幅 1.5m、高さ 1.6m をはかります。また、奥の部屋の壁石が 2 段積み、羨道の壁石が 1・2 段積みで、石の表面を平たく揃えてあるところに、近畿の主な横穴式石室の特徴がみいだせます。発掘調査の結果、吉野川産の緑泥片岩の石棺材や鉄釘などの金属製品、7 世紀中頃の装飾付き須恵器（子持器台）がみついています。7 世紀の装飾付き須恵器は全国的にも珍しく、それ以前の 6 世紀では、紀ノ川下流域の古墳でよくみられる特徴的なものです。

この古墳の被葬者は、吉野・紀ノ川を通じての交易・交流にかかわり、飛鳥に都をおいた中央政権ともつながりをもちながら、この周辺地域を拠点に、北と南・西への交通路を使って勢力をたくわえた有力者とみることができます。

### 【保久良古墳】

保久良（ほくら）古墳は、小字津角山（つかやま）にあります。享保 21（1736）年開板の『大和志』陵墓の項では「今日法具良塚」を「建王殯塚」に比定し、これをうけて明治 27（1894）年、『大和志料 上・下巻』（奈良縣教育會・大正 3・4 年公刊）を編纂した斎藤美澄（よしずみ）は、同書下巻・陵墓の項で当古墳を「建弭王殯塚（たけはちおうもがりづか）」に比定しました。

斉明（皇極）天皇（594 661）の孫、建皇子（たけるのみこ）（649 658）は、生まれつき声が出せず、8 歳で死去したと伝えます。皇子を愛した斉明女帝はその晩年、建皇子を失った

悲しみを歌にし、自らの墓に彼を合葬するようにと言い残しました(斉明紀4年条)。斉明天皇が詠んだと伝えられている「伊磨紀(今来)なる 乎武例(小山)が上に 雲だにも 駿(しるくし) たたば 何か歎かむ」の歌謡に登場する「イマキ」が、当町今木地区の地名の由来とされています。また、その後斉明天皇の御陵は「小市(越智)」に作られましたが、建皇子がそこへ合葬されたかどうかは不明で、建皇子の亡骸を一時的に収めた「殯(場)」は、「今城谷上(いまきのたにのへ)」におこされたと伝えます。

その「殯塚」と伝える保久良古墳は、片側にごく小さな袖部をもつ横穴式石室が南東に開口し、奥壁上隅に一か所盗掘坑があります。石室の全長は約9.5m、玄室(奥の部屋)が長さ約3.5m、幅1.1~1.3m、高さ約1.8m、羨道(手前の通路部分)が長さ約6m、幅0.8~1mで、玄室の幅が狭く、羨道が長い点を特徴としています。墳丘の形は不明ですが、石室の長さから想定して、長さ20m前後の規模をもつと推定されます。出土・採集品は知られておらず、築造年も不明ですが、石室の小さい事(羨道の長さに比べ天井が低く玄室幅が狭い構造)からみて、飛鳥時代の7世紀後半頃に築造された可能性が高いといえます。



CUT 13 保久良古墳  
石室から入口をみる(西より)

### 【正福寺古墳】

正福寺古墳は、今木地区の中野垣内にある、浄土宗の寺院・正福寺の南側の畑にある横穴式石室をもつ古墳です。当地は現在正福寺の所有となっていますが、かつては地元の名士・中野家の土地であったといい、中野家では昔から「森さん」と呼び、墳丘上の祠に欠かさず参り、下草の除去等が行われています。横穴式石室は南東に開口しており無袖で、壁石は雑然と積まれています。石室は、全長が約5.5m、幅1.1~1.2m、高さ約1.15m、石室の幅、高さが保久良古墳同様、狭く低い点を特徴とします。墳丘の形は不明ですが、長さは11.5m前後の規模をもつと推定されます。築造年も不明ですが、単葬を強く意識した定型的な石槨構造に類似することから、7世紀後半ごろに下る飛鳥期後半の古墳と考えられます。なお石室内で、今回の簡易測量調査時に平安時代に下る土師器片を採取しています。これにより後世の石室利用も想定されます。



CUT 14 正福寺古墳  
石室奥をみる(南西より)

### 【ジロウ古墳(坂合黒彦皇子墓)】

現在宮内庁の管理する「坂合黒彦皇子墓」は、安政年間(1854~1859)に当町今木字ジロウの地に比定されたものです。『日本書紀』の雄略即位前紀によると、坂合黒彦皇子は、安康天皇(黒彦皇子の弟)を殺害した幼い眉輪王(安康天皇に殺害された大草香皇子の子)をかばって、大泊瀬皇子(黒彦皇子の弟・後の雄略天皇)の怒りを買って、彼に味方した葛城の円大臣(つづらのおおのみ)や眉輪王とともに殺され、「新漢槻(擬)本南丘(いまきのつきもとのみなみのおか)」に合葬された、とあります。これについて、明治26(1893)年に『大和国古墳墓取調書』を書いた野淵龍潜(のぶちりゅうせん)は、上記の比定に意を反して、「南丘」の記述に基づき、「天狗森」と呼ばれている今木地区の南側の丘陵地に候補地を求めています。



### 【越部(こしべ)1号墳・2号墳】

越部川東方の丘陵端には、従来から古墳の存在が知られていましたが、平成9(1997)年、道路拡張工事に伴う発掘調査の結果、近接する2基の古墳の様相が明らかとなりました。

越部1号墳は、推定径約24m、高さ5.6mの円墳で、石室全長8.3m(玄室長3.6m)、奥壁幅約1.9m、現存の高さ約1.5mの片袖式石室です。越部2号墳は推定径約16mの円墳で、石室全長4.8m(玄室長3.1m)、幅約1.6m、現存の高さ約1.4mの片袖式石室です。両者ともに玄門部(石室の入口部分)に縦長の袖石を用いていました。これは、吉野川(紀ノ川)流域の古墳の特徴といえます。なお1号墳では、装飾付大刀の柄尻部分にあたる「金銅製単鳳環頭大刀柄頭」が発見されています。

これらの古墳の被葬者は、みつかった副葬品の様相からも、6世紀後半から7世紀にかけて造営された、当地の有力集団の長たちと考えられます(この柄頭は現在、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で常設展示されています)。また、1号墳からは、平安時代中頃(10世紀後半)の「堂」と書かれた墨書土器もみつかっており、9世紀中頃に成立した『日本霊異記』に記す「越部岡堂」にかかわる資料として注目されます。

### 【岡峯古墳(奈良県指定史跡)と野ノ熊古墳(下市町指定史跡)】

岡峯古墳は下市町阿智賀地区の丘陵上、町営住宅地のなかにある児童公園にあります。西向きに開口する横穴式石室の入口は、現在覆屋で閉じられています。昭和39(1964)年に発掘調査が行われて、その全貌が明らかとなりました。

直径18m、高さ4.5mの墳丘をもつ円墳で、石室の全長は約6m、玄室(奥の部屋)は長さ約3m、幅1.9m、高さ2.2mで、奥壁に沿って箱式石棺がしつらえられています。その上部には、厚さ0.25m、奥行0.85mの「石棚」が架けられています。石室の通路部分には、玄室前道部とよばれる「玄関」のような空間が備わっていて、これらの特徴から、奈良県内での代表的な「岩橋型石室」をもつ古墳として有名になりました。

副葬品の中には、金銅製の単鳳環頭大刀の柄頭や、唐草文・連続三角文をあしらった銀象眼のある金銅装黒漆塗大刀の柄頭がみつかっており、その被葬者が吉野郡内でも並々ならない力をもっていたことをうかがわせます。古墳の築造年代は、みつかった須恵器から6世紀後半～末ごろと考えられます。

なお、同じ阿智賀地区の野々熊の集落には、平成12(2000)年に発掘調査がおこなわれた野々熊古墳があります。墳丘については不明ですが、両袖式の横穴式石室で、石室全長7.38m、玄室(奥の部屋)の長さ3.15m、幅1.9m、高さ2.3m、床面には玉砂利を敷き、通路部分は閉塞のための石積みが残っていました。古墳の築造年代は石室の特徴から、岡峯古墳とほぼ同じ6世紀後半～末ごろと考えられます。

### 【稻荷山古墳】

新野稻荷神社の境内に残る稻荷山古墳は南向きに開いた片袖式



CUT 15 岡峯古墳  
石室内の石棚(西より)



CUT 16 稻荷山古墳  
(南より)

の横穴式石室をもちます。石室の全長約 5.2m、玄室（奥の部屋）は長さ 3.2m、幅が約 1.3m、高さ約 1.3m です。

石室内には石碑が安置され、境内に残る石塔群とあわせて、後世に行場として使われていたことが分かります。

#### 【林垣内古墳】

林垣内古墳は吉野町上市の町並みと吉野川を見下ろす丘陵の南斜面にあります。墳丘はほとんど流出し、石室が露出しています。石室は南に開いており、天井石や奥壁に大きな一枚岩が用いられているのを特徴とする片袖式の横穴式石室です。石室の全長は約 4.6 m、玄室（奥の部屋）は長さ 2.7m、幅約 1.4m、高さ 1.2mで、奥壁にむかって左側の袖部のみ、縦長に石を用いています。



CUT 17 林垣内古墳（南より）

#### 【堂山古墳】

堂山古墳は、通称大師山の中腹南斜面にあります。南向きに開く両袖式の横穴式石室で、石室全長約 7m、玄室（奥の部屋）は長さ約 2.8m、幅 1.9m、高さ 2.5m です。奥壁から斜めに持送る高い天井が特徴ですが、その構造は下市町の野々熊古墳に類似しています。



CUT 18 堂山古墳（南より）

#### 【吉野の古墳文化 出現と終焉】

吉野郡内の吉野川流域では、6世紀の終わり頃になってようやく、結晶片岩を用いた横穴式石室墳が登場しますが、それ以前に遡る須恵器が、近くに横穴式石室墳の分布しない土田遺跡・比叢寺跡（大淀町）宮滝遺跡（吉野町）などでみつかっています。また、6世紀の終わり頃の竪穴式住居も、付近に横穴式石室墳が知られてない佐名伝遺跡や土田遺跡で確認されています。

これらの遺跡を営んだ吉野地域の人々が横穴式石室墳を作ったのか、あるいは、紀ノ川下流域をはじめとする他地域からやってきた人々が、6世紀終わり頃から7世紀初めの短期間、吉野の重要地区を治めた結果、横穴式石室墳を作ったのか、今はまだ結論を出すことができません。しかし、吉野川を見下ろす丘陵上に築造された、岡峯古墳や槇ヶ峯古墳といった岩橋型石室墳の存在が、吉野地域と紀ノ川流域の豪族・紀氏との密接なつながりを示している事は間違いありません。

これに対し、御所市に近い大岩・今木地区では同じ頃から、大和盆地に類似を求められる石室が採用され、石神古墳のような傑出した有力者たちの墓域が形成されていましたが、そのなかに、吉野川の結晶片岩を石棺に用いる風習が確認されています。今木谷の保久良古墳、正福寺古墳は、7世紀でも後半を前後する規模の縮小した飛鳥期の古墳とみられ、吉野川流域との関係も深い豪族・巨勢氏との関係や、この地域での古墳の終焉の様子を知るうえで、重要な古墳といえそうです。

このようにして、古墳文化が終わりを迎えようとする7世紀の後半頃、吉野で最初の仏教寺院・吉野寺の比定地である比叢寺跡と、記紀に記す「吉野離宮」と考えられる宮滝遺跡の造営と利用がはじまり、吉野地域はいよいよ日本歴史の表舞台へと登場することになります。

（参考文献等は表4にまとめました。）

表4 吉野郡内の横穴式石室墳一覽

No.	指定	古墳名(遺跡名)	所在地	年代	標高(m)	墳丘(径・m)	墳丘(高・m)	埋葬施設形式	開口方向	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	石室高
1	大淀町指定史跡	石神古墳(大岩1号墳)	大淀町大岩字石神	7世紀中頃	275	22.5	4.3	両袖式横穴式石室	南	9.98	4.2	2	2.11	5.78	1.47	1.64	
2		大岩2号墳	大淀町大岩字前・長坂		275	15	2.25+		南								
3		大岩3号墳	大淀町大岩	7世紀後半か	275	自然丘陵		箱式石棺直葬	南東(主軸)	2.5(石棺)		0.6(石棺)	0.4(石棺)				
4		大岩4号墳	大淀町大岩	6世紀末	271	27.5	3.5	片袖横穴式石室	南東	10.87	4.6	1.95	3.5	6.07	1.37	1.6	
5		大岩5号墳	大淀町大岩	7世紀中ば以降	280	自然丘陵		無袖横穴式石室	南東	4		1.6	2				
6		保久良古墳(伝健皇子禰塚)	大淀町今木津角山	7世紀中ば以降	約150	約20	2+	片袖横穴式石室	南東	9.5	3.5	1.1~1.26	1.8	6	0.8~1.05	0.75+	
7		正福寺古墳	大淀町今木字寺ノ下	7世紀中ば以降	約140	11.5	2+	無袖横穴式石室	南東	5.5		1.1~1.2	1.15+				
8		ジラウ古墳(坂合鼎彦皇子墓)	大淀町今木字ジラウ		約150	14.8			不明								
9		越部1号墳	大淀町越部字堂ノ上	6世紀末~7世紀初頭	165	24	6	片袖横穴式石室	南西	8.3	3.6	1.5~1.9	1.5+	4.7	1	0.9+	
10		越部2号墳	大淀町越部字堂ノ上	7世紀前半	162	16		片袖横穴式石室	南東	4.8	3.1	1.6	1.4+	1.7	1	1.3+	
11	奈良県指定史跡	阿峯古墳	下市町阿智賀	6世紀末~7世紀初頭	160	18	4.5	横穴式石室(岩橋型)	西	6.05	2.95(0.8)	1.9(0.7)	2.2	2.3	1.08	1.8	1.4
12	下市町指定史跡	野々熊古墳	下市町阿智賀字野々熊	6世紀末~7世紀初頭				両袖式横穴式石室	南	7.38	3.15	1.9	2.33	4.23	1.15~1.32	1.54	
13		稻荷山古墳	大淀町新野字大西	7世紀前半か	約180			片袖横穴式石室	南	5.15	3.2	1.28	1.34	1.95	0.8	1.15	
14	大淀町指定史跡	横ヶ峯古墳(横ヶ峯1号墳)	大淀町新野字横ヶ峯	7世紀前半か	203	11	2.6+	横穴式石室(岩橋型)	南西	5.5+	2.2+	1.64	1.61	3.3+		1.1+	
15		横ヶ峯2号墳	大淀町新野字横ヶ峯														
16		横ヶ峯3号墳	大淀町新野字横ヶ峯														
17		横ヶ峯4号墳	大淀町新野字横ヶ峯														
18		横ヶ峯5号墳	大淀町新野字横ヶ峯														
19		正光寺裏山の古墳	大淀町新野		189	12											
20		北六田古墳(1号墳)	大淀町北六田御屋	7世紀前半か	約170			横穴式石室		5+	3.89	1.5+	1.95+	0.7+	0.8	1.33	
21		北六田2号墳	大淀町北六田埋内		約170			片袖式横穴式石室か									
22		北六田3号墳	大淀町北六田埋内		約170			片袖式横穴式石室か									
23		林垣内古墳	吉野町上市字林垣内	7世紀前半か	約180	不明		片袖式横穴式石室	南	4.62	2.72	1.36	1.21	1.9	0.8		
24		堂山古墳	吉野町上市字大崩山	7世紀前半か	約200	20前後		両袖式横穴式石室	南	6.59	2.84	1.9	2.51	3.75	1.16	1.12	
25		六軒町1号墳	吉野町上市字六軒町	6世紀末~7世紀初頭	約170	不明			南								
26		六軒町2号墳	吉野町上市字六軒町	6世紀末~7世紀初頭	約170	不明			南								
27		犬塚(古墳)	吉野町窪垣内		約230	不明	不明	河原石組石棺か									
28		南国栖古墳	吉野町南国栖		約200	不明	不明	不明									
a		佐名伝遺跡跡(竈付堅穴住居)	大淀町佐名伝	6世紀末													
b		土田遺跡(竈付堅穴住居)	大淀町土田	5世紀後半・6世紀末													
c		比曾寺跡	大淀町比曾	6世紀													

計測値については、太字のものは文献から引用。それ以外(保久良古墳、正福寺古墳、稻荷山古墳、横ヶ峯古墳)は、松田慶(大淀町教委技師)が2010~2011年に計測。阿峯古墳の計測値中( )は玄室前道部の数値を示す。

表4 吉野郡内の横穴式石室墳一覧

No.	出土品	調査年	調査主体(出土品保管先)	現状	現状	解説	文献
1	鉄釘、木葉状青銅製品、装飾付須恵器(子持器台)	1985・86年	奈良県立橿原考古学研究所	発掘後保存	あり	奈良県立橿原考古学研究所編「大岩古墳群,奈良県文化財調査報告書第57集 1988年	
2		未		保存	なし	同上	
3	刀装具、鉄釘	1985・86年	奈良県立橿原考古学研究所	発掘後移設	あり	同上	
4	須恵器	1985・86年	同上	発掘後未定	なし	同上	
5	鉄釘、須恵器	1985・86年	同上	発掘後未定	なし	同上	
6		未		保存	あり	小島俊次「歴史編第一章 考古学 今木の古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年,大淀町の文化財,宮久古墳,http://www.town.yodonoara.jp/maby/ekueku/ekueku_3.html#28	
7	土器	未	(大淀町教委)	保存	なし	小島俊次「歴史編第一章 考古学 今木の古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
8		未		保存	なし	秋永政孝「歴史編第二章第二節 新渡南の墓」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
9	馬具、鉄器、磁石、耳環、土器、須恵器、環頭大刀柄頭	1997年	奈良県立橿原考古学研究所	発掘後保存	なし	大淀町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 編「奈良県大淀町,越部古墳」,越部古墳調査報告書,大淀町文化財調査報告書第2冊 1997年。	
10	馬具、鉄器、磁石、耳環、土器、須恵器	1997年	奈良県立橿原考古学研究所	発掘後保存	なし	同上	
11	馬具、鉄器、磁石、耳環、ガラス玉、土器、須恵器、環頭大刀柄頭、銀象眼黒漆塗大刀	1964年	奈良県立橿原考古学研究所	発掘後保存	あり	奈良県立橿原考古学研究所 編「平群三里古墳 岡藁古墳 横ヶ藁古墳」,奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第33冊 1977年。	
12	須恵器	2000年	奈良県立橿原考古学研究所	発掘後保存	あり	大和電報19 2000年度発掘調査速報,奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2001年,橿原考古学研究所HP「下市町 野々能古墳」,http://www.kashihoken.jp/from-site/2000/narokuna.html	
13	須恵器?	未		保存	なし	下村(陽樹)「正和」大和原基の玄室内に石室のある古墳について,「上代文化」8号 1932年,小島俊次「歴史編第一章 考古学 稲荷山古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
14		1977・2010年	奈良県立橿原考古学研究所・大淀町教育委員会	保存	なし	下村(陽樹)「正和」大和原基の玄室内に石室のある古墳について,「上代文化」8号 1932年,小島俊次「歴史編第一章 考古学 横ヶ藁の古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
15				消滅か	なし	同上	
16				消滅か	なし	同上	
17				消滅か	なし	同上	
18				消滅か	なし	同上	
19				保存	見学可	同上	
20	馬具、銅環	1915年	奈良県立橿原考古学研究所(橿原市)	発掘後消滅	なし	高橋肇自「吉野郡北六田の古墳」,奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書,第六回 1919年,小島俊次「歴史編第一章 考古学 北六田(一)古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
21				消滅	なし	小島俊次「歴史編第一章 考古学 北六田(一)古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
22				消滅	なし	小島俊次「歴史編第一章 考古学 北六田(一)古墳」,大淀町史,大淀町史編纂委員会 1973年。	
23				保存	見学可	「吉野町史 上巻」,吉野町史編纂委員会 1972年。	
24				保存	見学可	「吉野町史 上巻」,吉野町史編纂委員会 1972年。	
25	金環、鉄槍、鉄釘、土器、須恵器			発掘後消滅	なし	「吉野町史 上巻」,吉野町史編纂委員会 1972年,吉野町文化協会 編「六軒町」古墳,「ふるさと吉野郷古写真集」,吉野町合併三十周年記念 1986年。	
26	金環、鉄槍、鉄釘、土器、須恵器			発掘後消滅	なし	「吉野町史 上巻」,吉野町史編纂委員会 1972年。	
27				消滅	なし	「吉野町史 上巻」,吉野町史編纂委員会 1972年。	
28				保存	あり	「吉野町史 上巻」,吉野町史編纂委員会 1972年。	
a	土器・須恵器			発掘後消滅	なし	南部裕樹「佐名伝遺跡 2003年」,奈良県遺跡調査概報(第二分冊)2003年,奈良県立橿原考古学研究所 2003年。	
b	土器・須恵器			発掘後保存	なし	豊岡卓之「土田遺跡」,奈良県遺跡調査概報(第二分冊)2002年,奈良県立橿原考古学研究所 2002年。	
c	須恵器			保存	あり	山本昭緒「松田遺跡」,奈良県吉野川流域の古代遺跡 - 吉野郡大淀町中津地区の調査 - 「青陵」,奈良県立橿原考古学研究所叢報No.124 2008年。	

表5 大淀町内の指定文化財一覧

番号	指定区分	種別	名称	所在地	所有者	所有者住所	指定年月日	時代	解説板
	国	史跡	比叢寺跡	大淀町比叢	世尊寺	大淀町比叢	昭和2年4月8日	古代	設置
	県	有形文化財 建造物	世尊寺太子堂	大淀町比叢	世尊寺	大淀町比叢	平成元年3月10日	近世	設置
	県	有形文化財 彫刻	木造十一面観音立像	大淀町比叢	世尊寺	大淀町比叢	平成18年3月31日	奈良	
1	町	有形民俗文化財 (信仰遺跡)	石塚遺跡	大淀町桧垣本	大和下瀨行者講	大淀町下瀨769	平成2年7月1日	中・近世	設置
2	町	有形文化財 彫刻	今木権現堂山門 木造金剛力士像二躯 仁王阿形像(右) 仁王吽形像(左)	大淀町今木	個人	大淀町今木1394	平成2年7月1日	江戸	設置
3	町	有形民俗文化財	蔵王権現堂内外石仏群 17点	大淀町今木	個人	大淀町今木1394	平成5年5月1日	室町	設置
4	町	天然記念物	ケヤキ	大淀町土田	土田区	大淀町土田	平成15年2月10日		設置
5	町	有形文化財 彫刻	木造大日如来坐像	大淀町大岩	大岩区	大淀町大岩	平成15年2月10日	平安	設置
6	町	史跡	柳の渡し	大淀町北六田	北六田区	大淀町北六田	平成17年6月21日	近世	設置
7	町	史跡	槇ヶ峯古墳	大淀町新野	大淀町	大淀町桧垣本2090	平成19年1月17日	古墳	設置
8	町	有形文化財 絵画	現光寺縁起絵巻	大淀町比叢	世尊寺	大淀町比叢	平成20年7月23日	近世	
9	町	史跡	石神古墳	大淀町大岩	株式会社奈良ロイヤルゴルフクラブ	大淀町大岩	平成22年10月8日	古墳	設置

番号 大淀町指定文化財番号

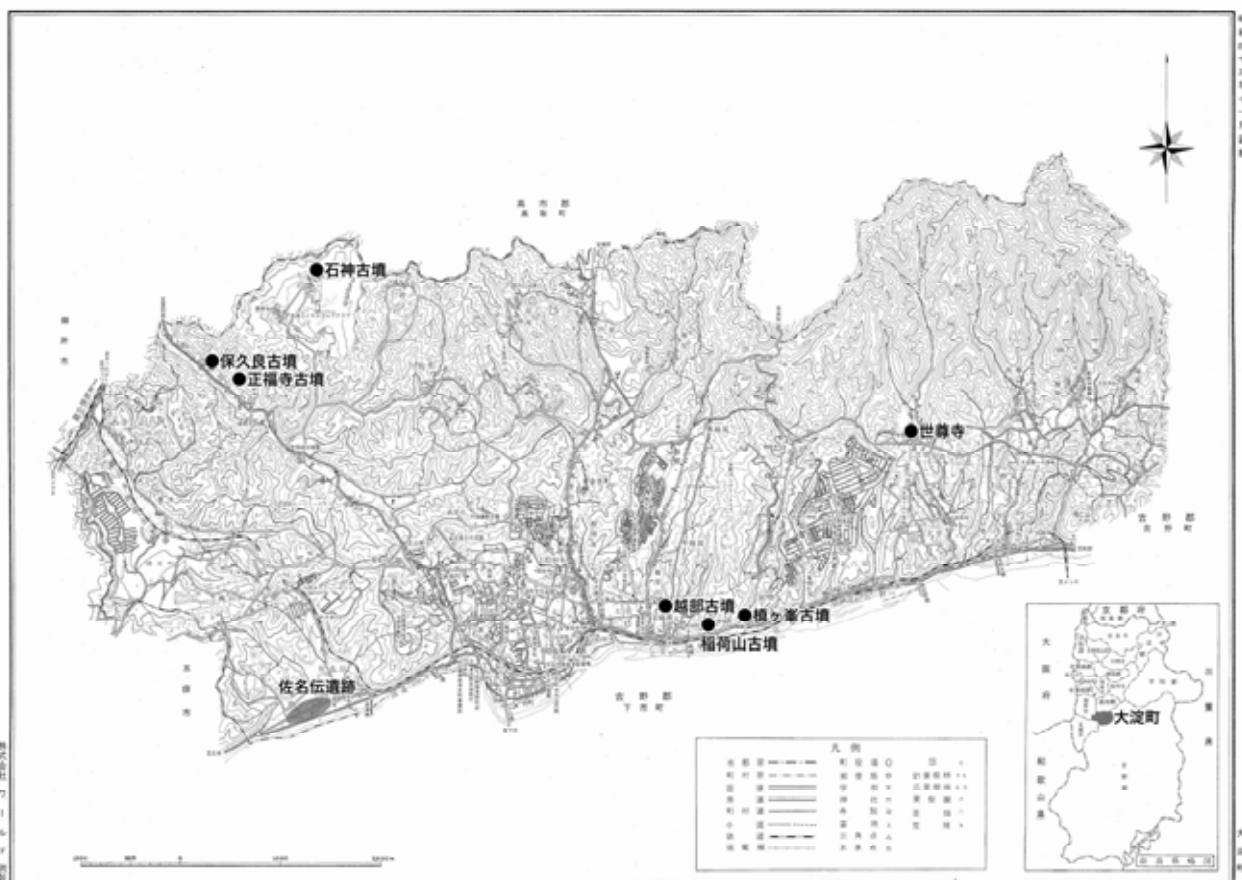


図3

## 報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうく-にじゅうにねんど おおよどちょうぶんがさいちようさほうこく -げんこうじえんぎえまき・さなていせき・まきがみねこふんのちょうさ-
書名	平成19～22年度大淀町文化財調査報告
副書名	現光寺縁起絵巻・佐名伝遺跡・槇ヶ峯の調査
巻次	
シリーズ名	奈良県大淀町文化財調査報告書
シリーズ番号	6
編著者名	奥山誠義・高橋平明・松田度
編集機関	奈良県大淀町教育委員会
所在地	〒638 8501 奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090番地
発行年月日	2011（平成23）年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
文化財（遺跡）名	所在地	市町村	北緯	東経		m <sup>2</sup>	
げんこうじえんぎえまき	ならけんよしのぐんおおよどちょうひそ	29442			2007.8～ 2008.2		学術調査
現光寺縁起絵巻	奈良県吉野郡大淀町 比曾762						
さなていせき(りんせつち)	ならけんよしのぐんおおよどちょうさなて	29442			2009.10～ 2009.11	11.2	農業用倉庫移転 予定地の造成工 事にもなう立 会調査
佐名伝遺跡 (隣接地)	奈良県吉野郡大淀町 佐名伝789-1						
まきがみねこふん	ならけんよしのぐんおおよどちょうにの	29442	34度 23分 21秒	135度 48分 39秒	2010.1	455	学術調査
槇ヶ峯古墳	奈良県吉野郡大淀町 新野528						

文化財（遺跡）名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
現光寺縁起絵巻	大淀町指定有形文化財 (絵画)	江戸			江戸時代前半期 京都絵師の制作
佐名伝遺跡	集落遺跡・散布地	縄文	なし	縄文土器(晩期) 石器ほか	縄文土器に水銀朱 およびベンガラが 付着
槇ヶ峯古墳	大淀町指定文化財 (史跡)	古墳	横穴式石 室(岩橋 型)	なし	航空測量による墳 丘規模の記録調査

# 平成19～22年度大淀町文化財調査報告

現光寺縁起絵巻・佐名伝遺跡・槇ヶ峯古墳の調査

奈良県大淀町文化財調査報告書 第6集

編集 奈良県大淀町教育委員会  
(〒638 8501 奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090番地)

印刷 岡本印刷所  
(〒638 3126 奈良県吉野郡大淀町新野342-2番地)

発行 2011(平成23)年3月31日